
無限物語 第1章（人殺し）

ひぐらしの79562

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

無限物語 第1章（人殺し）

【Nコード】

N9468M

【作者名】

ひぐらしの79562

【あらすじ】

平成20年 夏休み最後の日 まだ残暑がありまだせみたちの合唱が聞こえてくる。

都会から遠く離れた森、灯月の森。あかつきのもり そこにある地区、東山で毎年起こる毎年10人以上が謎の死に方をする事件……

この事件を知らない1人の少年がこの地に来ようとしていた。
無限の物語が今はじまる。

ただ幸せをつかむために……。

プロローグ

平成20年 夏休み最後の日 とある地方にある>灯月の森あかつきのもり<

……

そこにある地区>東山ひがしやま<…… 住民800人以下の小さな村、東山
……。

過疎化が進み徐々に人口が減ってきている。高齢化や少子化が進む
現在。しかし、

東山にはそれ以外の人口減少の原因があつた……。。

毎年10人以上が謎の死に方をして死ぬ事件が100年以上も前からあつたのだ。

なぜ、どうして死ぬかは分からない。でも1つ分かることがある。
それは、

>人が人でなくなる……。明らかにおかしくなる……。<

原因不明の風土病なのか……。それとも偶然なのか……。もし
かしたら……。。

もしかしたら……。誰かが起こしているのか……。何かがおか
しい、>魔の山（東山）……。<

そんなことも知らずに1人の少年がこの地に来ようとしていたの
である。

これから起こる物語は誰にも予想できない、無限の物語である。

ただ、幸せをつかむために……。

……人は幸せをつかむために

不幸も経験する……

……人は不幸を経験する変わりに

幸せも経験する……

……では教えてください。数多の不幸を経験した私は

なんで幸せをつかめないんでしょうか？……

詩題名>幸せをつかむために<

< i 1 4 6 4 2 — 1 7 7 3 >

東山

(始まり)

そこは、暗闇の中。辺り一面暗闇だけ、人なんているはずがない。人の気配すらしないそう、それは本当に何も無い無の闇の中。なのに、俺はそこにいた。まるで誰かに閉じこめられたように。

「一体、誰が俺をこんな所に？一体、何のために？俺が何かしたか？誰かに迷惑をかけたか？」

俺は独り言をつぶやいた。

.....

何もおきるはずがない。人なんていないのだから。

「……そ！」

俺はだれかいるわけではないのに汚い言葉を八つ当たりするように叫ぶ。

本当にだれもいないのか？本当に俺一人なのか？そもそも、なぜ俺はここにいるんだ？

だめだ何も思い出せない。もうこんな場所は嫌だ！だれか俺をここから出し

てくれ。俺はそればかりを願い続ける。強

強く願ひ続ける。

.....

無言が続く、俺は一人寂しい思いがやがて強く、強くなってきた。

「フン。フッフ、フヒヒ、フハハハハハ、ハハハハハハハハ、ハ
ハハハハハハハハハハハハハハハハ、ハハハハハハハハア、ハア、
ハア、ハハハハハハハ。」

寂しさと悲しさが混ざりあつて何とも言えない気持ちになった。

「何で俺笑つたんだろ？おかしいよな俺つて。ハハハハハハ、ハア
ー。一人が寂しいのがこんなに苦痛とは思つてもいなかつたぜ。正

直いってもう嫌だ。帰りたい。もとの世界へ。」

俺の独り言はまたむなく去ろうとしていた。しかし、そのとき俺に一つの光が舞い降りてきたのだ。

「あれは？一体何だ？」

俺は一人で首をかしげた。すると、光は大きくなった。

「……………け……………え」

えっ光がしゃべった！それも、小学校くらいの女の子の声が確かに聞こえた。もう一度耳をすまそう。

「……………けて。私たちを助けて。あなたが来ないとみんなが……………」

└

それは、助けを求める声だった。

「え？一体どういう事だ？何で俺が？てか、君は一体だれなんだ？教えてくれ。何で俺はここにいるんだ？君が俺をここに？」

「…………………………。」

質問をした俺にもかかわらず光は黙りこんでしまった。

「すまない。君がやったなんて決まっていな。質問を変える。

君は何で俺に助けを求めているんだ？俺は君の声を聞いた事があるような気がするんだ。一体いつあったけ？あるよな？あったこと。

何か言ってくれよ！」

俺は、質問を変えて今度の質問を強制するように投げかけた。その答えは？

「…………………………。」

やはり無言だった。もうあきらめるしかないのか？そう思った瞬間、何か聞こえる。別のだれかが何か言っている。俺を呼んでいるようだ。目の前がフラフラする。意識が遠のいていく。暗闇が消えていく。そのとき、俺は見たのだ。光が小さい女の子に変わっているの。しかし、上手く顔が見えない。えっ？また何か言っている。何だろう？

「どうか、幸せでありますように……………」

「……………えっ？」

俺は、最後の言葉だけがとても、気になって仕方がなかった。

（東山１）

気がつくと、俺は暗闇の中から解放されていた。頭がぼーとする。一体ここはどこなんだ？俺は、頭をあげた……がその瞬間、ゴンと音がした。

「痛って~~~~~~~~!!」

俺は、後ろを振り替える。そこには……親父がいた。

「痛いのは、こっちの方だ！父さんがせつかくうなされていた、お前を起こしていたのに、起きたと思ったらいきなり頭つきだ〜！？父さんに恨みでも、あるのか？」

俺は、激痛で目が覚めた。すべてを思い出した。ここは、電車の中だ！そうだ、俺は引越しをするんだ。えーと、確か引越し先は……………???

「新しい引越し先の東山^{ひがしやま}ってどういう所かしら？楽しみだわ！」
「そうそう、東山だ！ありがとお袋！」

「うん。とっても田舎だよ。交通もあんまり発達してないんだ。でも、自然がとってもきれいで空気もとってもきれいだよ。」

と親父がお袋にこたえた。そうか！親父が元々住んでいた場所なんだよな。

おっと、そーいや紹介まだだったな！俺は海道 龍牙。いたって普通の中学２年だ……って俺は誰に紹介してるんだろ。まあいいや。「龍牙、新しい家に行ったらすぐに引越しの片付けをするぞ。こういうのは男仕事だからな！がーはははは！」

「えー俺、明日の学校の準備が……………」

俺は親父のお願いを断ろうとした。・・・が

「りゅーがーくーん。」

隣からか細い声が・・・俺は恐る恐る隣をみた。そこにはお袋が今にも泣きそうな顔でこちらを見ている。やばい、やばい。

「なんでしょうか。お母様。」

ガタガタと振動が伝わってくる。電車に何時間も乗っていたのに、今度はバスか……何か、とっても大掛かりな引越しのような気がする。俺の家族ってちよつと変わっているよな。普通に友達みたいなかんじだし……さつきもあつたけど親父とお袋の性格もおかしいよな……。まあ、楽しいからいいのかなあ？ だいたい、こんな田舎に引越すのもちよつと変わっているよな。もう俺は、眠気はおきなかった。俺って電車で何時間寝ていたのかな？ それに、あの夢は……？

「おい、龍牙！」

「ん？」

いきなり親父が俺に呼びかけてきた。

「何だよ？」

俺はだるそうにかえした。

「いいか、これは真面目な話だ！ 真剣に聞いてくれ。いいな？」

「い、いきなりなんだよ！」

しかし、親父の顔は真剣そのものだった。

「わ、分かったよ！ 聞くから。」

仕方なく俺は、聞くことにした。

「ゴホン、いいか龍牙。父さんの仕事の都合で引越しをした。それは、知ってるか？」

「いや、初めて聞いたな。それで？」

「それで、お前は学校生活も1からやり直した。つまり、お前が学校で上手くやっていけるのか、父さん達は不安なんだ。」

「……………」

俺は言葉が出ない。実は俺も不安だったんだ。

「その様子じゃ、自分自身も不安なんだろ？ やっぱりな。父さんも経験したことあるから分かるぞ。そこで、龍牙！ 父さんからの頼みだ。」

仲間を作れ！ 全て分かりあえるなかまを！ そして、その仲間を大切にしろ！ それだけだ。」

「何だ、それだけ？ 俺はてつきりもつと重要な話かと思っただぜ！
緊張して損した。」

「なっ、父さんはこれでも、心配しているんだぞ！」
「そうなのか？ 俺はそう見えないが……」

「きゃー、父さん素敵よー」

「ん？ そうかい！ そう言われるとてれるなー。母さんも素敵だよ。」
「あー、また始まった。やっぱり俺の家族って……」

「そう思っていると、ブローン キッキーとブレイキ音が聞こえた。
「おっ、着いたようだ。龍牙ー降りるぞ！ 忘れ物がないようにしろよ！」

「へーい、分かってますよ！」

俺はいつも道理に親父の事を軽く返した。……えっ？ 視線を感じる。俺は窓を向いた。そこには、仮面をつけた少女が立っていた。だれだ？ 俺を見ているのか？

「龍牙ー。早くしろー。」

親父達が俺を待っている。俺は親父達の方を向いて、適当に返事をした。そうして、もう一度窓を見た。しかし、少女はそこには、いなかった。

俺は、急いでバスから降りようとした。あの子は一体？ 早く降りてあの子を……

「おい、坊主。」

えっ、今度は一体？ 俺は声のする方に振り返った。

「あんた達が噂のよそ者だね？ 聞いているよ。」

それは、バスの運転手だった。

「はい、そうですけど。よそ者っていう言い方は良くないと思いますよ。」

俺は不機嫌そうに言った。見た目としゃべり方で俺の好きじゃないタイプと分かったからだ。嫌らしそうな顔、嫌みのようなしゃべり方、全部嫌いだった。

「ああ、すまないねえ。昔ながらの風潮ってやつでして。海道さん。」

ふっふふ。」

「えっ？何で名前を？」

すると男は続けて鼻で笑った。

「ふっふふふふ、すみませんねえ。私はこういう者です。」

> 大川 十流く（おおかわ とおる）

そう、それは名刺だった。

「はっ？俺あなたの名前なんて聞いていないですけど。」

俺は怒りがこみあがってくる。

「あらあ、私はてっきり俺の名前を呼ぶ前に自分の名前を名乗れって言ったと思ひましてねえ。ふふふ」

ぶちつと音がして俺の何かが切れる音がした。

「てめえ~~~~~~~~!!」

「やめるんだ!!」

いつ来たかが分からないが親父が止めに入ってきた。

「落ち着け龍牙！ 抑えるんだ。」

「おや、おや、問題児ですねえ。お宅の子供。しつけをしないと。」

だー~~~~んとすごい音がした。

「それ以上言つと、俺が黙っちゃいねえぞ！」

その音は親父が窓ガラスを殴った音だった。ひびが入っている。

俺が親父を初めて格好いいと思った瞬間だった。

（東山3）

バスの中は沈黙状態が続いた。が、沈黙を破ったのがあいつだった。

「いや、驚きましたよ。やっぱり子供が問題児なら、親も問題児なんですね。いやはや、窓ガラスが・・困るな、私が怒られるんですよ。」

あいかわらずこりてない。一体何なんだこいつ。俺はそう思いながら親父の方を見た。すると、親父は、
「すみません・・・。」

えっ。謝った？俺は親父をみつめた。

「龍牙、行くぞ……。」

親父は悔しそうな表情でバスを降りた。俺は、最後に運転手の大川をにらんだ。すると大川は、また鼻で笑った。

「君も気を付けなよ。この魔の山、東山にはね。フフフフ。」

「なっ、どういう意味だよ？ 魔の山って。」

すると、大川は続けて言った。

「フフフフ、本当に何も知らないんですね。いいでしょう教えてあげますよ。」

俺は大川の言葉にイラつとしたが抑えて、うなずいた。

「この話は他言しないようにしてください。いいですね？」

俺は続けてうなづいた。

「この山は昔から謎の死に方をする人がいるんです。毎年10人以上、多いときは数十人死んだ年もあるんですよ。そして、俺の息子も犠牲者だ。」

「あんたの!？」

俺は驚きが隠せなかった。

「フフフフそうです。私の息子。去年行方不明になったんです。おかしくなっただけ。そう、人が人でなくなり、何者かに操られる。そういう感じです。」

ゴクリ。俺は生唾を飲んだ。

「そして君は俺の息子に似ているだよ。次は君が狙われるよ。」

大川の目が鋭い。全身に汗。さっきから手と足が震えてる。

「……フフフフ、何てね。さあ、そろそろ降りないとまた君の親父が来てしまう。さあさあ降りた降りた。」

俺はバスから無理やり降ろされた。

何なんださっきの事件？ うそ？ 本当？ ……

俺は考えた。すると後ろから足音。近づいてくる。恐怖で振り向けない。

しかし、俺はごまかされているような感じがして仕方がなかった……。

（東山4）

俺達はバスから降りた所から徒歩で新しい我が家に向かっていた。もう30分近く歩いている。けれども見える景色は木、木、木……見飽きたなあ。けど空気も澄んでいて気持ちがいいぜ。頭に酸素が回ってなにかが思い浮かんできた。

「あ~~~~~~~~~！」

俺は思わず大声を出した。親父とお袋も何ごとかと俺を見ている。

「お袋！ずっとバスの外いたよな！」

「えっ？あ、うん。いたけど、どうしたの？」

「見なかったか？」

俺は単刀直入に言った。

「何を？」

「お袋、冗談はなしだ、見ただろ。仮面をつけた小さな女の子。」
お袋は真面目な俺の雰囲気がよめたようだ。お袋の顔もまじになっている。

「見なかつたわよ。そんな子。龍牙どうしたのかしら？」

「え……………？？」

俺は、信じられなかった、お袋は見えてない？なぜだ。じゃああの女の子は？…………一体どこに？どうやって？窓の外にいたはずなのに。あの一本道の所を人に見られずにどうやって？

誰かに聞こうと思ってもそんな子一人もみていない。いや、聞かなくとも分かること言っても信じちゃもらえない。俺は一人で考える。あの子は本当にいたのかと。

詩、題名（俺は独りで考える） 海道 龍牙

結局、1時間近く歩いて新しい我が家に着いたのだった。

（東山5）

俺は家に帰っても考え続ける。あの女の子の事、そして東山の事。今日はいろいろありすぎたな。何のやる気もおきない。荷物も片付いてない。ああー何かとつてもムシヤクシヤする。

そのとき、お袋が1階から呼ぶ声が聞こえた。

「龍牙！ちよつとおつかい頼んでいいかしら？」

くー、こんな気分のおつかいかよ。嫌だが、断ると面倒くさいし。

「分かった、分かった。」

俺は買い物メモを持って自転車をこいで何kmも離れた商店街に行くのであった。

30分くらい自転車をこいたら、商店街についた。さすがに人は多いな！俺は買い物メモに書いてある物をせっせと買い集める。

「よーし、全部買ったよな。しかし、すげー量だなこれ。おつかいにしちゃー、ハードすぎるぞ。」

俺は独り言をぶつぶつ呟きながら自転車にまたがろうとしたとき、後ろに気配！俺はさっと振り返った。そこには！？

「?????!」

女の子、それも小学生くらいの。俺を見てこう言った。

「お兄ちゃん！卵を忘れてるよ。」

えっ！？俺は買い物バックの中を見た。確かに買い忘れている。

「あー！！誰だか知らんがサンキュー！でも、何で??」

しかし、彼女はこたえようとせずになだクスツと笑って行ってしまった。

俺は、また悩み続けて帰るのであった。

学校

（学校）

朝。今日から夏休みも終わりいよいよ学校！それも俺は新しい学校というなかなか体験できない始業式が始まるうとしていた。

何事もいつも道理が肝心だ！

いつも道理の朝飯に、いつも道理の雰囲気。だが、違った所もいくつかある。ていうより、違った所のほうが多すぎる。家も違えば家具の配置、テレビのチャンネル。

ああーやっぱりいつも道理なんて無理がある。ここはあきらめて、自己紹介で言う事でも考えとくか！

そうして、時は経っていき、いつも道理の登校時間……あつ！

俺は今になって気付く、俺のいつも道理の時間は前住んでいた所のときたと。つまり、学校までいく道のりが違うと……ってことはこっちのほうが道のりは長い。んでもって、いつも登校時間ギリギリだった俺は………？

そのとき、俺の頭の中に漢字2文字の言葉が浮かんできた。「遅刻」という、言葉が。

「あー………！なんでこんな時にはいつも道理がでるんだよー！！」

俺の新たな学校生活は遅刻から始まったのであった……。

（学校1）

キンコンカンコン。ひさびさの学校のチャイムが鳴り響くけれど今は、めちゃくちゃ速く鼓動している、心臓の音の方が音が大きい。

初日からの遅刻はどこぞの漫画主人公のお決まりパターンだぞ！？俺は、そう考えながら教室を探す。が、すぐに見つかった。ていうか、学校狭っ！都会の学校とは大違いだぜ。クラスも一つだな。よ

うし、ここはあえて落ち着いた感じで入ってみるか！

そう考えドアに手をかけた。ガラガラ……

クラスはシーンとしていた。が、ちらりと俺の方を見ている奴がちらほや。……って、ここにいる生徒は制服ないのか？それも何か小さいな……ってあれ？ここって、小学校？

「失礼しました。」

俺はそういつて教室を後にしようとした。だが

「海道 龍牙くんですね??」

俺は声のする後ろを振り返る。そこには……美人。とても綺麗な女の。もしかして、先生？俺は慌てて、

「すみません。小学校と中学校を間違えるなんて思いませんでした！」

すると、先生は笑顔で言った。

「いやだわ、ここは中学校よ！」

「えっ、でも制服着てないし、背小さいですけど。」

俺は混乱を抑えてこたえた。すると先生は笑いを抑えて、言った。

「だから、ここは小中一緒の学校なんですよ。クラスも一緒。ほらよく見て！」

俺は先生の言う方向に目をむける。そこには、5人の中学生。制服はバラバラだな。

「あっ!! えっと……。」

俺は緊張と恥ずかしさが隠せなかった。

ふと見た瞬間に心の中に花が咲きました。

なぜかとても嬉しくて涙が出そうになりました。

きっとこれからだいじょうぶそんな気がしたからです。

詩題名「心花」 作者、海道龍牙

(学校2)

俺は静かな教室に落ち着きを隠せない。

「んつと、えーと。……………」

俺は何をすればいいのか分からない。家でだいたいイメージしてたんだけどな。

「えー、ではでは海道くん。自己紹介をしてくれるかな。」

おろおろしている俺に先生が声をかけてくれた。そうだ！自己紹介だ！家で頭の中を整理してきたから大丈夫！俺は一回深呼吸をして、口を開いた。

「みんな、おはよう！今日も一段ときれいな青空だね！僕は今日からここに転校してきた、海道龍牙と言います。性格はちよつぴりドジでかんが鋭いと言われるけど、自分じゃそう思っていない。血液型はO型の身長162cm、体重は

ひ・み・つとういうことでこれからもよろしく！」

キラーン。決まった。そう思った俺であつたが。教室は拍手すら起きない。ずっとシーンとしたままだ。俺何かいけないこと言つたけ？それともやつぱりさっきの自己紹介でドンびきした？それとも、まさかそうだ！俺は一つ言い忘れていたことを思い出した。そう、それは

「好きな女性のタイプは理想としては同い年なんだが、夢としては年下。頭の中では年上を！常に心がけています！」

ピシーン！！これでどうだ。みんな拍手を！！

「プツ、クスクス、あはははは、ははははは！」

？？？笑い声？そうみんなが笑つたのだ。クラスのムードが一気に変わる。

「誰だよ！最初に笑い出した奴は！？せつかく無言転校生あせらせ作戦だつたのに！しかし、おもしろー。自己紹介で好きな女の人のタイプをいうなんて。」

クラスの小学校男子が騒いでいる。

作戦？じゃあさっきのシーンとした雰囲気は……………すべて作戦だつたのか！

俺は1日にしてクラスの人気者(?)になった。

(学校3)

キンコーン、カーンコーン。授業が終わり、休み時間になった。ちよっとトイレでも行こうかな。なんて思っていたら、俺の席はクラスメイトに囲まれていた。

「な、何かようかな？ちよっとトイレ行きたいんだけど……………」

俺はそう言っただけで席を立とうとする。だが、

「ちよっと待ちな！」

鋭い声がした！俺は声のした方向に顔をむける！そこには？

「君は？確か俺の席の隣の、名前は、何だっけ？」

そう、その子は俺の隣の席の女の子だった。髪は長くて、結構かわいい

「あたいは、紅川^{あかがわ} 優香^{ゆうか}！ここの学校の委員長だよ！」

> i 1 4 6 9 4 — 1 7 7 3 <

ピシーンと決まっている。辺りのクラスメイトも拍手している。しかし、この娘かわいい顔に似合わず性格が荒いな。そう思っている。ピシッと俺の額に指があたった。

「痛っ！な、何すんだよいきなり！」

俺は額をなぜながら言った。そしたら委員長の紅川はニタツと笑い言った。

「分からない事が隣の席のあたいにききな！あたいが教えてあげるよ！」

そう言っただけで紅川はどっかに走って言った。一体何だったのだろうか？そう思っていた俺だが、腹がタプタプしている。

「トーーーーーイーーーーーレーーーーー！」

・
・
・

危うく漏れるところだった！スツキリしたぜ！そう思いトイレから出ようとすると、

「おい！転校生。手を洗わんとはどういう事だ？都会の奴は小便した後、手を洗わんのか？下品だな。都会人は！」

「何だよ、お前！俺は今から手を洗おうとしていたんだよ！」

そうそこにいたのは、いかにも頭が良さそうな背の低いメガネの男子だった。まあ、実際手洗い忘れていたけど。だがこいつの言い方は失礼には程がある。

すると、こいつはクールな声で言った。

「俺は平泉^{ひらいずみ} 彩人^{さいと}。ここは、都会とは違うんだよ転校生。」

そう言っていると平泉 彩人は行ってしまった。始めから終わりまでクールだがむかつく奴だな！そう思いながら、俺は教室へともどった。

（学校4）

教室の前に来ると中が騒がしい！？俺は思った。まさか、不審者か！？

「みんな！大丈夫かー！ー！ー！」

そう言つてドアを開ける！ガラガラ。

「危なー！ー！ー！ー！」

えっ！？と思う時にはもう遅く、俺の顔面にはあるものが飛んできた！どかつ！そうそれは、室内用スリッパだった。やべー、もろ鼻に飛んできたな、痛つてー！ー！。

ばたん、そのまま俺は倒れてしまった。意識が……………

・
・
・

気がつくと、いかにも薬という臭いがする所に俺は寝ていた。一体何が起きたんだ？俺はそう思い体を起こす。が、ポタと何かが俺の制服に落ちてきた。最初は何か分からなかったが2滴目が落ちてきたときにようやく分かった。赤黒いドロツとしたもの、「血」だ！

でもどこから？俺は落ちてくる所をたどった。鼻だ！

「あうつぷ！やべー。ティッシュ！ティッシュ！」

俺は思わず声をあげてしまった。

「どうしたの！？」

そのとき、ベッドの周りを囲んでいたカーテンが開いた。視界が一気に広がったような気がした。視界が広がって初めて分かった、ここが保健室であることに。

「大丈夫か？ゴメンナ！うちのせいでごげんな事になるなんて。」

「あつ、えつと、……………」

そう、そこにいたのは髪短めなポニーテールの女の子だった。名前が分かん。

「あつ！ゴメンナ！うちの名前は花谷 りん！あつちにいるのが弟のらんや！」

えつ！？あつち？ そう花谷 りんの向こう側のはじっこに小さいツンツン頭の男の子がいたのだった。

（学校5）

「えつと、一体何で俺は保健室なんかにいるんだ？」

と俺は2人に問いかけた。2人はお互いに顔を見合わせてでへへと笑っている。俺はこいつらを見て分かった。姉弟の大切さが。俺は一人っ子だから姉弟なんてもんはいねえけど、この2人を見ればまるで俺も姉弟の中にいるみてえだ。

「仲いいな！」と俺は言ってみた。が2人は俺をにらんで言った。

「はー！？誰がこんな奴と仲良しなんだ！」

完全にはもった。同時のタイミングで2人は俺に怒鳴る。

「うちらはさつきも喧嘩したんや！だからさつきあんたの顔面にらんのスリッパが飛んできたやろ！分かる！？りゅうちゃん！」

「なる程！だからスリッパが飛んできたのか。てか、りゅうちゃんって呼び方はよせよ。」

俺は恥ずかしくなってそっぽ向く。

「いいじゃん！それ。ナイスアイデアだぜ！りん姉！」

弟のらんはあきらかに俺をおちよくろうとしている。なんなんだこの姉弟は！？

「そもそも、喧嘩はよくないぞ！辺りの人も迷惑するからよしとけ！今回は俺だったから良かったものの、これが先生だったらどうしてたんだ？」

俺は自分でもいいことを言ったと思った。2人もちよつと恥ずかしそう。

「だってー！ー！」

「だってまってもない！これからは注意するように！」

そういつて、俺はほつぺたを膨らませた2人をあとに保健室を出るのだった。

昨日俺は引越して 不安と孤独がいつぱいで

今にも仲間が欲しくなりました

今日俺はここに来てたくさんミスをしたけれど

たくさんみんなの笑顔がありました

今日俺は新しい希望と仲間に満ちあふれ

幸せみつけることができました

詩題名＞仲間と幸せく 海道 龍牙

下校

（放課後）

俺は放課後まで寝ていたらしく教室に戻ったら教室の中は静かだった。俺はもうみんな帰ったんだなと思い、机の横に掛かっているバックに教科書なんかを詰めて帰ろうとして、振り返る。

ドタン！

「痛つてててて！なっ？なんだー？」

俺は突然起こったことだったので何がこったか分からない。一体何が起こったんだ？

「痛つたー！ーい！」

へっ！？俺はふと気付く。目の前で女の子が倒れている。俺は何が起こっているのか分かった。ぶつかつたんだ！

俺はここは最初に取り上がって、女の子に手を差し伸べて「ごめん。」と言うのが普通だな！と思い起き上がろうとしたとき。俺の目の前に手が差し伸べられていた。

「ごっ・・・ごめんなさい。あたしの不注意でもうごめんなさい。ごめんなさい。どうしよう。どうしよう。ぶっ！？」

「えっ！えっと。うん。だっ、大丈夫だよ。」

そう言つて、俺な思わず差し伸べられた手を握つて立ち上がってしまった。普通逆だろ！相手は小さな女の子だぞ！

「えっと、名前は？」

俺が訪ねると、女の子はぶーと言つて答えた。

「あたしの名前は木下 桜。ちょっと小さいかもしれませんが、中学1年です！ぶー！」

えっ！中学1年生？会ったときから思つてただけだけど小さい！それも可愛い！本命にしてもいい位に！

「桜ちゃんか！俺は大丈夫だが桜ちゃんは怪我不いか？」

「はい！大丈夫です！ぶー」

本当に可愛いなー。ぶーっていうところがたまらん！今思ったら2人つきりじゃねえか！？そう意識するとドキドキするなー！

「なあ、桜ちゃん。」

すると、桜ちゃんはぶーと可愛い仕草で俺を見つめる。行け！男、

海道 龍牙ー！

ガラガラ

その時ドアの開く音がした。そこにいたのは？

「おっ！いたいた！桜！転校生！何やってんの？待ちくたびれたよー！」

学級委員長 紅川 優香

「なんで！なんで！お前がいるんだよ！せつかくの場の雰囲気が出無しじゃねえか！それも俺は転校生っつー名前じゃねえ！」

「ありやありや。そりゃごめん、お二人ともいい雰囲気だったのか！あたいはKYだから分かんなくつよ！ニヤハハハハ」

こいつめー！本気で言ってるのか、ざとやってるのか分かんねえー！「ぶー！優香！いい所に来たのです。龍牙と2人つきりだったので何をされるのか怖かったです。」

ガシャーンと俺の頭の中の桜ちゃんのイメージは一瞬にして消えていった。俺のイメージって一体・・・？

「そろそろ、行くよ！」

学級委員長 紅川 優香がしきる！

「行くってどこにだよ？」

「もちろん！龍牙の家ですよ！ぶー」

（下校1）

学校帰り道。簡単に言うとは下校。俺は1人で帰るつもりだったが、女子3人と帰ることになっていた。それもみんな俺ん家まで。学級委員長 紅川 優香とクラスメイトの木下 桜、それに今回いきなり登場の桜ちゃんの妹、木下 天音。この子はおとなしくあまり口を開かない。でもでも、やっぱり桜ちゃんに似て可愛いぜ。俺達が

教室でごちゃごちゃしてる時にはもういたらしいけれど静かすぎているもないも同然だった。

「おい！お前達！いくら地元の人だからといって俺の家までは知らないだろう？のんきに俺の前を話しながら歩いてはぐれちまっても知らねえからな！」

「大丈夫！大丈夫！気にしないでいいよ！
んでね、昨日のテレビなんだけど・・・。」

本当に大丈夫なのか？紅川 優香！つと言おうとしたけど女子の話を邪魔したらいけないと思いやめた。女子の話にはついていけんし、男子が入るのはどうかと思いとりあえず自分家を目指す。

・・・・・・といつても、長い。やっぱり話に混ぜてもらうべきか？いやいや、俺は男子だ！男子ならこれがあるじゃねえか！

彼女にするならどの娘？ゲーム いえーい！パフパフ！

一人で寂しいがとりあえず1人ずつ分析してみよう！まず1人目、学級委員長 紅川 優香！ 最初話した1秒間で性格やスリーサイズまでがだいたい把握できた。やっぱり中2だけあって、男を刺激するナイスバディ！！顔も美人だし彼女にするなら迷わない！と言いたい所だが、性格にこいつは問題がある！これさえ無くせば男共はこいつを彼女に欲しがるだろう！

でへへへ！次は、木下 桜！まだ小さい果実だがもつと大きくなつたなら金色に光る特別な果実になるだろう！この俺が言うんだ！間違いない！それに、大きくならなくとも、可愛い仕草とぶーという口癖が男の脳に刺激を与えて、脳を活性化させる！この刺激を欲しがって全男は争いを起こすだろう！

グフフフ！そして桜ちゃんの妹、木下 天音ちゃん！かわいい顔でいつも恥ずかしそうにして喋らない！しかし、その行動こそ男達の求めている行動！恥ずかしそうに喋る姿もまたいい！まだ喋った事

ないから情報量が少ないがきつとこの娘も大物だー！

俺はじっくりこの情報を元に彼女にするならどの娘にするか真剣に悩んでいた。

（下校2）

・・・あれから、何分経っただろう。俺はまだ真剣に悩んでいた。前の女子達の会話は未だ終わろうとしていなかった。

俺の優柔不断のせいで彼女達に迷惑がかかるかもしれない！と思うと尚更真剣に悩む！親父ならどうするだろう？と俺は親父の気持ちになつて考える。・・・これは、考えるだけ無駄だな！親父ならこの娘全員と言うに決まっているからな！まあ、その選択も悪くないかー！と思う俺は親父のいない遺伝子をもものすごく受け継いでいるのだろうか！？そう思うと俺の将来は一体・・・？

「転校生！」

その時、俺の耳元で誰かが叫んだ！

「うわっと！なつ、何だよ！？いきなり耳元で叫ぶな！それも、その呼び方はよせといつとるだろ！」

やはり、耳元で叫んだのは紅川 優香だった！俺はそいつめがけて怒鳴り返した！さすがに、紅川もびっくりしてるな！イツヒヒ、いい薬になったかな と考えている俺だが、後ろに気配！振り向いたがもう遅く、そこにいたのはまたしても紅川だった。

ポフッ！！

「ぐへー！！！」

俺は振り向いて1秒後に地面にひざまづいていた。ポフッ！って何の音だよ！？

「ぶー 龍牙くんのお腹に優香の拳が入ってKOー！」

「あはっ ごめん転校生！ついつい手が出ちゃったよ！」

拳！？あの紅川の拳か！？もろ入ったぞ！それも、何で二人とも笑

顔なんだよ！天音ちゃんだけかよいい子は！

「優香は空手、柔道、剣道、合気道、弓道などなど、小さい頃からやっていてとても強いんです！ぶー」

なっ！なんだよそりゃ！初めて聞いたし、それを早く言えよー！

「ありゃ！そっぴやあたいまた、転校生って言っちゃったなー！転校生は一体あたいたい達に何て呼んでほしいの？」

そっぴえばそっぴだな。俺にあうあた名は・・・！？

「龍ちゃん！」

「えっ！？」

俺は頭より先に口が動いた。このあた名、確か・・・！？

「龍牙くん！そのあた名もしかして、りんからのどっちかがつけたでしょう！？ぶー！？」

「えっ！？あ、うん。花谷らんがつけたよ！でも何で！？」

俺は桜ちゃんに問いかけた。

「ぶー！？だって、名前の一字の下にちゃんってつけるのあの姉弟がやってるです！」

「じゃあ！あたいたい達もそのネーミングセンスのないあた名で読んであ・げ・る！」

そんな事言われるとこの名前で本当に良かったのかと自分に問いかけた。

（下校3）

あれこれ30分、やっと俺の家に着いた。今思うと俺の家って結構遠い・・・。

「ぶー！やっと着いた！てか、地元の奴だからって俺の家まで良く来れたな！？」

「それ位分かるよ！ねっ！桜に天音！」

何で2人に聞くんだよ！？全くこいつの考えが分かんねえ！それも、木下姉妹も何で顔を見合わせ笑ってたんだよ！！

「全くお前達は・・・」

「それでは早速お邪魔しまーす！」

「わーい！」

「人の話を最後まで聞け！それに、勝手に人の家に上がりこむな
ー！」

そう言つてあの3人の後を俺は追つていく。あいつら本当に何考えて俺の家まで来てるんだ？分かんねー！

「ここが、龍ちゃんの部屋！？もうちょい、面白いものすごいがた
くさんあると思つたんだけど、意外に普通でつまんないのー！」

「つまなくて悪かつたな！それも面白い物つて何だよ！？」

今日は本当にいい日（？）なのか！？

「んで！？俺の家まで来て何するきなんだよ！？」

俺の問いかけがスイッチだったのか分からない。場の雰囲気が一瞬にして変わった。3人の表情も。

「龍ちゃん。いやここは分かりやすく転校生で呼んだ方がいいかな。
これから話すことは決して嘘でもふざけ話でもない。真剣に聞いて
くれる？」

俺は一瞬その呼び方はよせつて言つてるだろ！つて言おうとしたが
ふざけ話じゃないと聞くと口が動かなかった。それにこの3人の表
情。何かあると察知したからだ。

「分かった。真剣に聞くよ。」

そう言つと3人は安心したのか少し表情が軽くなった。

「ごめんね！この話が終わつたらまた龍ちゃんて呼ぶよ！そしてま
たふざけあおう！」

「ああ！もちろん俺もそのつもりだがな！」

いつものふざけた紅川ではなくまさに真剣な紅川だった。そして、
また彼女は話し始めた。

「じゃあ、始めるよ！この東山、100年罰当たり事件の話を！」

（下校4）

家の外はもう暗くなり始めている。鈴虫も辺りで鳴き始めた。俺の部屋の中だけ時が止まっているみたいだ。

「転校生は知らないんだよね？東山１００年罰当たり事件？」

真剣な眼差しで紅川が俺に問いかけてきた。バスの運転手、大川十流が言っていたやつか。だいたいあいつから聞いたが詳しい話を俺は知らない。それも本当なのか事態怪しいのだ。

「いや、聞いた事ないな。なんだその東山なんたら事件つーのは？」俺はわざと全く知らないふりをした。

「そうか……。やっぱりか。じゃあ、話すね。」

そういうと紅川の目の色が変わり、口を動かし始めた。

「この事件は、名前の通り１００年前から続いているらしい。その事件の内容は、簡単に言うと、殺人だよ！」

殺人か……。大川の話では殺人が事故か分からないって言ったよな。だが、紅川は殺人と断言した。やはり、大川の話はデマだったのか？でも１００年前からっていう部分は噛み合っている。

「なあ、紅川！」

「転校生。優香でいいよ。そっちのほうが呼びやすいでしょ。」

「ああ。分かった。じゃあ、優香！その事件は絶対殺人なのか？」俺は改まって問いかける。

「転校生。この写真を見て！」

紅川がそう言うと、天音ちゃんがバックの中から数枚の写真を取り出した。

「なっ……。……。……。」。

俺は言葉が出なかった。何故ならその全ての写真が、血だらけの人が死んでいる写真だったからだ。一体何で！？

「ごめん。気分悪くさせたなら、写真片付けるけど……。」。

優香が気を使ってくれる。だが、ここで写真を片付けてしまったら、どんな感じに死んでるのか分からない。

「悪い。大丈夫だ。写真をそのままにして話を続けてくれ。」

「うん。分かった。転校生この写真の人達全員、血だらけで倒れて

いるね。つまりこれは何か鋭利な刃物で自殺か殺されている。って思うのが普通でしょう。」

「ああ。確かに普通の人ならそう思うだろ」

俺が答えてまた優香の話が始まった。

「でもね。この写真の人達、全員。目立つ傷が無いの！」

「えっ!？」

傷がないのに血!？」

(下校5)

リンリンと鈴虫が鳴いている。時計はもう8時を回ろうとしていた。

「傷が無いのに血って!？どういうことだよ。」

「分からない。でも、少しの外傷ならあるの。でもこの血の量は有り得ない!」

俺は何が何だか分からなくなっていた。

「優香。疲れたでしょう。ここからは私が話します。」

そう言くと、優香とバトンタッチして桜ちゃんが話し始めた。

「それも、この事件が起こる場所。つまり、犯行現場がいつも一緒なんです。」

「んで、その犯行現場ってどこなんだよ？」

すると、桜ちゃんはぶーっと言くと、口を動かし始めた。

「学校の・・・裏山。」

えっ!？桜ちゃんだよな!？今喋ったの?人格、声、話し方。全てが別人のようだった。

「だから、龍牙くん。いいえ、転校生。裏山には、近づくな!」

びくっ!？本当にこいつ桜ちゃん!？

「桜ちゃんだよな?」

「・・・・・・ぶー?」

一瞬疑ったがこの可愛い仕草は桜ちゃんだよな!そう思い俺は安心した。

「じゃあ、そろそろ帰るね！」

「ん？あつ！ああ。送らなくていいか？」

「大丈夫！変な奴が来たら、あたいの上段回し蹴りでイチコロだよ！にやはははははは！」

そういうと、3人とも笑って玄関のドアの前まで行って、足を止める。

「龍ちゃん！裏山には絶対近づいちゃだめだよ！」

「分かってるって！お前こそ夜道を送ってやらなくていいのか？」

ポフッ！

本日二度目の腹に拳が入った。

「ぐふおー！ー！」

「ハハハハハハハ！」

最後はみんな笑って帰って行った。

今日の夜は家に誰もいない。1人でさびしい。というより少し恐怖感があつたかもしれない・・・。

楽しいことが全てじゃない。

恐怖で一人の怖い夜

君なら一体どう過ごす？

詩題名＞1人で怖い夜く 海道 龍牙

休日（前書き）

初めての休日・・・。
仲間たちと・・・。

休日

今日は、土曜日！もちろん学校は休み！今日は家でゴロゴロとこうかなー！っと俺は思い、家のリビングで新発売の漫画「竜の玉」を読んでいた！なかなか面白い漫画だ！今日は、コミック一巻から読み直してみるか！と思った時だった！

トウルルルルルル！っと音がした。

「龍牙ー！電話よー！」

やはり電話だったようだ。てか、お袋電話出るの早っ！と思いつつ、一体引越したばかりの俺に誰が電話してるんだ？と疑問に思った。そして、お袋から受話器を受け取り話す！

「もしもし、俺だけど！」

俺が話すと電話主はフッフと笑い話す！

「ありやりや、龍ちゃん！そりやおれおれ詐欺！？ちっちち！あたいから金を奪おうなんて139万年足りないよ！」

受話器から聞こえた声は昨日も嫌な程聞いた声だった！

「お前、もしかして・・・優香か！？何でお前が俺の家の電話番号を知ってたよ！？それも、そのきりの悪い数字はどこから出てきてんだよ！？」

そう電話主は優香だった！

「にやはははは！あたいは優香とはまだ一言も言っていないもんねー

！そのまま、お金を振り込むのだ！龍ちゃん！」

「いやいや、その声と話し形からして優香しかあり得ん！それも自分から正体ばらす詐欺師がいるもんか！」

ピーン どうだ俺の推理能力！自分ながらいけたはず

「いやー！お見事お見事！自分の推理能力に今頃うぬぼれてるんでしょう？」

なっ！何で分かるんだ！？俺、口に出しちゃったか！？

「ふふふ！今、何であいつ分かるんだ！って顔してるでしょう？違

う？」

なっとなななな！何で分かるんだよ！俺言ってないよな！

「ニヤハハハハハ！ところで、龍ちゃん！今日用事とかある？」

疑問に思っている俺に予想していた会話がやはりきた！ここは暇じやないと言わないと漫画が俺を呼んでいる！

「ああ！実は今日・・・」

と言おうとした瞬間だった。

「漫画読むとか言わないでよ！？」「竜の玉」のコミックを読破するとか言わないよね！？」

なんなんだ！？こいつ次から次へと俺の事が見えてるみたいに・・・

見えている！？

俺はリビングの窓の所に駆け寄り、窓をおもいつきり開けた。

「ありやりや！？龍ちゃんおはよー」

「おはよー じゃねえよ！」

そこにいたのは、携帯電話を片手に持って、物陰に身を潜めていた優香だった！

隠れ鬼（前書き）

隠れ鬼……。それは、仲間との絆を深めるための魔法のような遊び……。。

隠れ鬼

(隠れ鬼1)

あたり一面まだ夏のように蝉が鳴いている。本当に秋になるのか
って思うほどに五月蠅い(うるさい)。

俺たちはその暑さを遮るかのように木陰側を歩いていた。

「あーあ！せっかくの休日が誰かさんのせいで台無しだー！」

俺は横目で隣の誰かさんをにらむ。もちろん隣は優香だ。

「いいじゃん！どーせ漫画読むほど暇だったんでしょ？」

そもそもなぜ俺たちは歩いているかというところ・・・。

・
・
・

あれから俺たち2人は見つめあいつていうかにらみあいつていう
が無言の状態が続いていた。何て言えば帰ってもらえるとか考えた
けど現に漫画を読んできるところ見られてるわけだし・・・。

「よし、今日は雨だな。今日は家に引きこもろう！」

俺はそう言って窓を閉めようとした。が、窓に誰かの手が挟まった。

「痛いなあ・・・。龍ちゃんには・・・こんなに晴れているのに・・・

・雨粒が・・・見えるのー？」

優香は痛そうに作り笑いをしている。このままいけば、あいつもあ
きらめるのかな？そう思うが、なんだか俺の良心が働いて思わず手
の力が抜けてしまった。

「りゅーうーちゃん」

窓は開き優香が入ってきた。不法侵入！と言おうとしたが、もう遅
い。ビシッ！ゴキ！グチャ！と音がする。明らかに最後のは打撃の
効果音じゃないよな！？

「あらっ！？龍牙！？誰か友達が来てるの！？」

そのときお袋が戦闘終了後のリビングに入ってきた！

俺がそう聞くと優香はでへつと笑って言った。

「あなたとあたいの恋が実る場所」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

はっ？

「お前！俺をおちよくるのもいい加減にしろー！」

「ありゃ？龍ちゃん、まさか本気にしちゃった！？あははは！まあ、インドア派のお坊ちゃまだから仕方ないねー！」

「てめー！まだ言うか！まあ、確かに俺はアウトドアよりインドア派なんだが・・・！でも、中で遊びたいときの方が多くだけで、外で遊ぶときもあるし外遊びの英雄ドラゴンとも呼ばれたんだぞ！」
優香はそれを聞くなり腹を抱えて笑い出した。まあ、当然俺の言ったのは嘘である。昔から、室内遊び一筋だったからな！

「あは、あは、あははは！はあはあ、苦しい。英雄ドラゴン（笑）」
そこまでつけたのか？こいつのつぼが分からん。

「龍ちゃん！いや、英雄ドラゴン！そこまで言うのならあたいが今日決着をつけようじゃないか！」

「ビシーン！！と優香が俺に指を指した！決着も何も俺はお前というライバル的な関係になっただよ！？」

「そもそも、その決着はどこでするんだよ！？」

「龍ちゃん。今向かっている所が今日の勝負場所さ！」

勝負も何もお前と勝負したらいつか骨が折れちまうぜ。・・・いや、むしろいつか死ぬと言った方がいいかもしれない！

「ちつつちつ！龍ちゃん！あたいの勝負を勘違いしてないかい？今日の勝負は特別だよ！」

「特別って何だよ！？相撲か！？」

ベシッと俺の頬にはりてが！！くっそー痛ってーなー！

「レディがそんな事すると思ってるの！？」

お前ならやりかねん！と言おうとしたが今度ははりてだけじゃすまないかもしれない・・・と思いやめた。

そして、俺の家から約15分。優香が足を止めた。

「さあ！着いたよ！今日のバトルフィールド！月光寺だよ！」
 げっこじ
 そこには、たくさんの階段の上に古い大きなお寺が建っていた。

(隠れ鬼3)

辺りは木々に包まれ、木陰とせみの合唱の中に建っている、月光寺。俺と優香はその階段の150段目を登り終えた所だった。

「なー！優香！ここの階段何段あるんだ？」

俺は頭から流れ落ちてくる汗を手でぬぐいながら話す。

「さあー？300段くらいあるんじゃない？何、龍ちゃん。もう疲れちゃったのー？」

優香は何食わぬ顔をした言った。

「二、この英雄ドラゴンが疲れわけねえだろ！」

そう言ったがもう話す気力すら残ってないのだ。暑いぜー！インドア派の俺には厳しいぜ！お家が恋しいよー！

そう思ってるうちに階段を登り終えてた。俺、やればできるんだな！頑張ったぞ！俺！

「何自分に感動してんのー？」

優香が隣で呆れている。

「いいんだよ！多分この気持ちがかかるのはインドア派の仲間達だけだよ！みんなありがとう！」

「ぶーっ！龍牙くんがとうとうおかしくなっちゃたですー！わーい」

ん！？この声は、まさか！？と思い振り返る。そこにいたのはやはり、桜ちゃん！ついでに天音ちゃんも！てか、さつき桜ちゃん俺がおかしくなってるのに対して喜んでただろ！？でもなんでこの美少女姉妹が？

「ようこそ！ 私たちのお家へ！」

•
•
•
•
•
つ
^
?

「今、桜ちゃんは何て言った！？私たちの何？」

「ありー？言つてなかったけ！？桜と天音の家。つまり、木下家は月光寺に住んでるの！つまりお寺が家だよ！」

えくく！お寺が家って！すげーな色々と！

「んじゃあ！桜ちゃんと天音ちゃんのお父さんは・・・？」

「ぶー！？お父さんは普通の会社員！お母さんは普通の主婦！おじいちゃんが、お坊さんで村長さんですー！」

あー！おじいちゃんがお坊さん！んでもって村長さん！・・・えっ！？村長さん！

「桜ちゃんのおじいちゃんが村長さん！？」

「ぶー！言いませんでした？私たちのおじいちゃんはこの東山の村長であり、地区会の会長さんなのです！」

しっ、知らなかった。

「だから、龍ちゃんの家も電話番号も家族構成も桜と天音と私が知ってるよ！」

「ちよつと待て！桜ちゃんと天音ちゃんなら分かる！なんで優香が知ってたんだよ！」

すると、桜ちゃんが笑い出した。

「桜ちゃん・・・。まさかと思うが、君が教えたんじゃないよな！？」

「龍牙くん！スマイル」

「スマイルじゃねーよ！個人情報だだ漏れじゃねーか！」

こうして、今日もこいつらのせいで1日がおかしくなりそうだ・・・と俺は一人思ふのだった・・・。

（隠れ鬼4）

月光寺に着いて早10分。俺の家を出て1時間位たって午後になるうとしていた。月光寺はせみ達の声と女子達の声で盛りあがってた。俺は一人、女子の会話についていけずに階段で座っている。俺は何のためにここに来ているのか分からない。決戦とやらはどうなった？

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
ん!？」

そう思っているそのとき、階段の下に人影が！子供の二人組。まさか・・・・・・・・!？」

「おっ!？やつと来たか！こつちだよー!」

優香が俺の隣に来て、耳元で叫ぶ。耳が痛つてーな、くそー!・・・だが、やはり来たのはあの姉弟2人組。花谷 りんとらんだった!

「龍ちゃー!ーん!覚えている?うちやよ!りんやよ!」

「俺だよ!龍ちゃん!らんだよ!覚えてるだろ!忘れたなんて言わせないぜ!」

この個性あふれる姉弟を忘れるわけがない。忘れよーとしても、頭から離れてくれないだろうな・・・。

「お前らも決闘に参加するのか?」

俺はそう思いながら2人に問いかけた。

「いひひひ!決闘かー!俺達も参加するぜ!いひひひひひ!」

らんが不気味に笑っている・・・。そもそも、決闘が決着だがらんが何をするんだよ!？」

「ところで、優香!今日は何をするんや?」

えー!ー!？ちよつと待て。りんも知らんのか!？てつきり俺だけかと・・・。

「よーし!何をしようか?」

俺は力が抜けて思わずこけてしまった。やること決めてないのに決闘とか言つてたのかよ!

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・隠れ鬼。」

ぼそつと誰かがつぶやいた。・・・それは、天音ちゃんだった。

「「「おっ!それいいねー!」」」

みんなの意見が合意したようだ!

「ちよつと、質問していいか!？隠れ鬼って何!？」

みんなは俺の質問に驚いているっていうか唖然としているようだ。

そして、俺の腹になぜか拳が入って、優香が説明をする！

「隠れ鬼とは、鬼役の人が最初一人！そこからどんどん増えていく！まあ、かくれんぼと鬼ごっこが混ざったみたいなもの！鬼は絶対逃亡者を見つけたときに見つけた事を相手に聞こえるように言う。そして、それを言うまで鬼は半径10m以内に入ってはならない。もし、入ってた場合、そこで10秒間かずえる。10秒間たったら鬼の行動は再開されるよ！」

「ぐふっ！（腹にきいた）。．．．なんだかややこしいな．．．」

「

「まあ、習うより慣れろ！早速始めるよ！」

「「「おー！」」」

優香のかけ声でみんなは腕をあげた．．．！

（隠れ鬼5）

正午になる30分前。月光寺には俺と5人の子供達が集まっている。

「じゃあ、早速、じゃんけんといくよ！」

れんが手をグーの形に言う！最初の鬼決めだな！

「それじゃあ、やろうやないの！」

りんは手をチョキにしている。

「ぶー！負けないのですよ」

桜ちゃんは手をパーにして笑っている。

なんなんだ？こいつらの会話は．．．？仕草もグーチョキパー？

俺はそう思っていると、優香が桜ちゃんの肩を持つ。

そして、みんななうなずき優香が叫ぶ！

「文句なしだよ！じゃあいくよ！最初は．．．！」

よーし来た！こんなにじゃんけんで白熱のバトルをするのは小学校以来だな！いくぜー！

「「「パー！」」」

「グー！」」」

こいつらの仕草の意味が今頃分かった。一人ずつ思っていたこと

を考えると。グーの仕草をした、らんの思っていたことは・・・

（普通のじゃんけんをする？）

そして、チヨキの仕草をしたりんは・・・

（龍ちゃんなら何か勝ちそうだよ！みんな同じものを出せば負けるか勝つかだよ！あいこのときもずっと同じやつで！チヨキをずっとだしとこうや）

パーを出した桜ちゃんは・・・

（それじゃあ、負けます！もう、最初はパー戦法でいきましょう！龍牙くんを必ず鬼にできます！）

んで、もって俺以外のやつはそのサインを見て、今に至るわけだ。

優香が桜ちゃんの肩を持ったのはそのためだったに違いない！

だが、これは反則中の反則だろ！反論なしではいられないだろう！

「おい・・・！」

「ありー？龍ちゃん文句なしだから反論しないよねー」

うぐっ！？心を読まれた！？それも文句なしとはそれじたいがずるい！その、優香の笑顔もずるい！反論しようにも反論したら言葉じゃなくて拳が飛んでくるだろ！？その笑顔は絶対そうだ！

「うぐぐぐ！くっそー！はめやがって！いじめだ！いじめ！そのサインは反則だー！」

すると、優香が近づけて来た。

「鬼は君しかいないんだ！他の人は鬼は似合わないのだよ！君がいかに重要な存在がこれで分かるだろ！」

「そっ！そうなのか！鬼ってやつぱり俺しか無理なのか！照れるなー」

そう言っただけ俺は頭をかく！

「では、目をつぶって、3分間待ってくれ。よろしく頼む」

そういって、優香、桜ちゃん、天音ちゃん、りん、らはそれぞれ隠れ場所に散らばる。だが、今思うとさっきの言葉がっこよく聞こえるけど普通に鬼は俺だけがやればいいみたいな感じ（？）じゃねえか！

「あー！ー！！もう、さっさと終わらせて家に帰らないと漫画くんが俺を呼んでいる！そのために俺が3分間まってやる！<とでもいうと思ったか！隠れ鬼だが高んだか知らんが、みんなとっ捕まえてやるー！」

そう言つて、俺は今日の範圍月光寺の庭から探すのであつた。まあ、考えているうちに3分以上待つてたな！待つてくれ漫画くん！

ルール（前書き）

隠れ鬼のルールBOOK

ルール

隠れ鬼ルール

- ・鬼は普通にじゃんけんで決める。
- ・最初の鬼は一人。
- ・鬼は捕まえることでどんどん増えていく。
- ・鬼は見つけたことを相手に伝えなければならない。そのときに相手の名前（あだ名でも可）をいうこと！
- ・逃亡者は範囲から出ることによって自動的に鬼となる。
- ・鬼は逃亡者を見つけてないときは歩き又は小走りとする。
- ・隠れる場所は基本的にどこでも可。
- ・鬼になった者は重要な理由がないと辞退できない。逃亡者も同じ。
- ・基本的に逃亡者がいなくなったらゲームは終了とする。その場合、鬼と最後の逃亡者が勝者となる。
- ・嘘は許されない。
- ・何よりも安全に気をつけること。事故、怪我が起こった場合、すぐに治療、連絡を全員ですること。

・みんな仲良くやること！それが一番大切だよ！

・・・紅川 優香のルールブックより・・・

隠れ鬼・・・その続き（前書き）

あれから後の、隠れ鬼・・・はたしてどうなったのか！？

隠れ鬼・・・その続き

（隠れ鬼）

日はもうすぐ真上にこようとしていた土曜日……。月光寺（木下桜ちゃんと天音ちゃんの家）の庭で……。俺は、倒れていた……。！？……。せみ達は俺をばかにしてるように騒がしくなった……。それにしても暑っつい……。インドア派の俺は10歩歩いたところでダウンだ……。って思っているが実際だるいだけである。なんだって、じゃんけんで負けて最初に鬼になるのはたぶんほとんどの人はだるいと思うだろう……。てか思え！思わないと人じゃねー！

おっと、いけねいけね。ここは執念場だ（？）。過去のことより今を楽しめ！って誰か言ってたよな！よし、探すか！

そう思い、俺は一人寂しい思いをそらえて立ち上がる。

「……………」
「むっ!?」

早速だが気配！これは、りんの気配だ！俺って結構気配が分かるんだよね　そしてりんの気配は……………！？

脳回路がぐるぐると光の速さで回りだした……………。

「……………」
「りん！お前は……………ここだー！ー！」

指を指したその先は……………寺の床下！つまり寺の建物と地面の間の隙間だー！

「いや……………龍ちゃん。うちはここだよ。」

そのとき……………上の方から声……………。もしかして……………!？

「りん！ここであつたが58年目！見つけたぞー！」

「あかん！うち思わず教えてしもうた！逃げにやあかん！あわわわ」
そこにいたのはやはり、りん！寺の屋根にのっている！結構危ねーが早くのぼらないと!……………そう思ったが、結構屋根が高い……………

はしごなんかもないし、あいつはどこから!?

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・まさか!?!」

俺は寺の裏にある落ち葉がたくさん集まって山になっている場所へ!

「逃がすものかー!」

俺は落ち葉のところへスライディング!りんは落ち葉にふわっと!・・・・・・・・ふわつと?

「キヤー!・・・・・・・・・・・・・・・・!?!」

俺は見てしまった!今日は何て運がいいのだろう(?!)。このまま死んでも構わないや!今の俺の顔は幸せに満ちているだろう!仏様よりたぶん満面な笑顔だろう!

「りん!捕まえたと!ふふふ!りん、今日はスカートで良かったね」

俺はりんをタッチする。りんは顔を赤くして答える!

「触るな!このド変態野郎が!」

バチン!

答えたつていうより怒鳴ってる!俺の顔は今どんなだろう!?今も笑っているのかな?それとも絶望に満ちているのかな?まあどっちにしても・・・・顔が赤いのは変わらないや!だって・・・・りんが叩くんだもん!

俺は永遠の眠りにつくだろう・・・・!けど俺は幸せでした!みなさんありがとう!これで第1章は終了・・・・

「終わらんやろ!思わずやってもうたが!大丈夫か?」

あら!心の中読まれた!?

「あはははは!俺は大丈夫さ!今幸せに満ち溢れているよー!」
ビシッ!

俺の頬に1発目より強力な2発目の爆弾が落ちてきたのだった・・・。

(隠れ鬼)

あれから、俺とりんは一緒に行動していた。相変わらず俺の頬は腫れている……。あれは事故だよな！俺だけのせいではないよな！なのに俺の頬は悲惨な事に……。言葉も一時はまともにしゃべれないであろう……。

「にゃあ（なあ）！りん！おみゃえ（お前）がりゃん（らん）だったりゃ（ら）、どこに行く？」

やつぱり、上手く喋れん……。

「ひひひひひ！龍ちゃん！滑舌が悪い！面白いね！はははは！」

誰のせいだ！明らかにお前のせいだろ！

「うーんと、うちがらんやつたらなあ……。いくら姉弟でもそげいなこと分かんよ！」

「そうか……。てか、お前ら姉弟って双子じゃないのに双子並みに似てるよな！」

すると、りんは目をつりあげる！

「似てないよ！性格は正反対だから！」

あれ？そんなに否定するか！？まあきつとまだ喧嘩中なのだろう……。

「うちがもし、らんやつたら……。」

……！！？

ぼちゃん。鯉がたくさんいる池に俺達はたどり着いた。りんはここにらんがここにいるという……。いや……。隠れようにもこの池はあり得ないだろ！

「らん！？池のどこにいるんだ？あー！分かった！あのでかい岩の後ろだな！」

らんは首を横に振り、指を指す！

「あれは……。……。……。……。竹筒！？だよな……。？」

りんは呆れてその竹筒を見ている・・・。

「まさか・・・。ねえ？遊びにも関わらず、ここまで隠れるわけないよな！？」

りんは俺に向かって指を指す！

「龍ちゃん！見なかったん！？さっき優香がくれた、隠れ鬼ルールブックみたいなやつ・・・。隠れ鬼は遊びでやらずにみんなは戦争みたいな、感覚でやってるんや！あのルールブックやてみんなにくばっとなよー！」

おいおい、ちょっと待て！なんかそれ初耳なんですけど・・・！？
そう思っているとりんが続けて話しかけてだす・・・。

「それでね、らんって、昔から隠れるの下手やからいつも最初に捕まっちゃうたんよ・・・。んで本人なりに考えて一番いいって考えたのがここらしいんやけど・・・。うちらには全然通用しとらんかったから・・・。あいつは一時隠れ鬼不参加やったんや。今日久々参加したのは・・・勝てる相手が見つかったって・・・言うとなよ。」

「それも、ちょっと待て！あいつは俺に確実に勝てるって思ってたのか！？まあ確かにりんが言わなかったら分からなかったがな・・・。
「まあ・・・、早速捕まえるか。」

俺はそう言い、竹筒の上の穴を手のひらで押さえる。・・・。
・・・。
・・・。
１０秒位たって、水の中から気泡がブクブクと浮いてきた。・・・さらに、何かが浮いてきた。
「ぶはー！きつい！誰だよ！俺の忍者７点セットの一つ！た！けづつの穴を塞ぎやがったのはー！ー！ー！」

「見つけた！」

そして、後ろのほうにいるらんがタッチする！ヤッター！と思う反面、らんの服装を見るとがっかりする。

「らん・・・。お前の服装・・・。」

すると、りんは恥ずかしそうにして、らんはよくぞ聞いてくれました！とばかりに喋りだす。

「あつはー！龍ちゃん！気になるー？これはね！通販で買った、これを着れば忍者になれる。忍者7点セットなのさ」

りんは呆れと恥ずかしの目でらんを見つめている……。らんは自慢げに鼻下をかいている！

「さすがの俺でもひくかも……。」

俺は愉快的姉とコスプレの弟をひきつれて次の標的、桜ちゃんを探すのだった……。

（隠れ鬼）

じりじりと夏の暑さの光が俺達3人を照らし続けている……。

「何で、よりによって桜なんや？」

あいからわずの方言（？）で俺にりんが話しかける。

「何でって……。そりゃー！桜ちゃん！桜ちゃんが最初はパー戦法を提案したんだろ……。？」

すると、らんがびつくりした表情で俺を見つめる。

「えっ！？龍ちゃん、気づいていたの！？俺達が作り出したサイン！」

まあ、わかりやすいサインだし……。でもそれに引かかった俺って……？

「桜は一応ここの寺の子供なんよ！隠れる場所は無限にあるって言うてたし……。」

りんが言うつとらんは隣で頷く。

「ふん！お前ら何ビビってんだよ！？隠れる場所が無限？ははは！そりゃ好都合なんだよ！」

俺の強烈な一言に2人は理解できてないようだ。

「つまり！無限だが高んだが知らんが！その力と対等な力！つまり無限の隠れ場所があるのなら、無限の力で探しだすんだ！目には目を！歯には歯を！無限には無限で対応してやれー！」

キラーン 決まった。

「さっさと龍ちゃんなんてほっというて桜を探そう！」

「よし、そうするか！」

俺の隣には誰もいなく・・・2人は俺を見捨てて遠くにいる！遠くにいるのに関わらず声が聞こえる・・・わざと聞こえるように言ってるだろ！

「くそー！お前ら俺の名言を無視してそんな所に・・・そこで待つちよれ！」

だが2人はもう見えなくなっていた。

「たく・・・あの双子じゃなくて姉弟は、どこまで俺のこと馬鹿にしてるんだよ！今に見てる！・・・と言いたいところだがちよつとトイレ！」

そう言つて俺はトイレを探すけどどこにもないな・・・寺の中にわざわざ入るのは何だし・・・。

月光寺の庭の隣にはまだ刈り終えてない草むらが・・・。

「ごめんなさい神様！今日だけは許してください！」

俺は思わず声に出して言った。そんな事より漏れちゃう、漏れちゃう！

俺は草むらに入りなるべく人目に入らないところを探す・・・あったあつた！

「はー！人間が自然と一緒にになるいい時間だよな！でもこれは男にしかできねーよな！女って・・・。」

「ぶー！龍牙くん！女がどーしたの？」

「あー！女がかわいそう！って言おうとしたんだよ！」

・・・えっ！

「ちよつと待て！何で桜ちゃんここにいるんだよ！」

すると桜ちゃんは笑って答える！

「ぶー！私はここで隠れているのです！龍牙くんはトイレですね」

「そうそう！トイレ！って見てるんじゃないねー！ー！ー！」

その後、20分。俺達は4人に増えたが、優香と天音ちゃんが見つ

からずひたすら探し、木の上にいた優香はなんとか見つけた！天音ちゃんは寺の中で眠っていた！木下姉妹！範囲こえてるから！失格！！

よって、この勝負俺と優香が勝者となり、漫画を読むより楽しい１日となったようだった。

だが、一つ気になること……。月光寺には、学校の裏山につながる道がある。

そこには、立ち入り禁止の看板が立てられていた……。

川遊び（前書き）

龍牙の家に不吉の影・・・。
それは一体・・・！？

川遊び

次の日。太陽はもうすぐ真上へきていい時間。

俺はまだベッドの中。昨日の疲れが取れないんだろう。まだまだ寝足りない！お休みなさい！何も起こらなければこれで第1章は終わりだよ！今までありがとう！

ガチャン！

「終わらないわよ！」

えー！ー！お袋！？俺の心読めるかよ！？てかノックしろよ！

「ごめんごめん！ノック忘れてた！そんなことよりも早く降りてきなさい！」

お袋は今日は機嫌が良さそうだ。

「えっ！？今日、日曜日だよ！？寝てていいんじゃないの！？」

「あんたって子は鈍いんだから！」

鈍い！？なんだそりゃ！？体が遅いってことか？まあ確かにインドア派だな。

「フフフフフフ！」

最後に笑ってお袋は降りて行った。

こえーよ！なんだよさっきの笑いは・・・？

そう思いながら俺も降りてみるのだった・・・。

「おはよー！」

一階に降りて、リビングに入る。俺は毎朝挨拶は欠かせない！

「おはようさんきゅーベリーマッチ！」

相変わらずの親父の挨拶！お袋は早速、家事をしている。

「おはよー！龍ちゃん今日も元気そうだね」

「おう！今日も元気な龍ちゃんです」

この声、この口調！昨日も聞いた。

「・・・ってなんで優香がいるんだよ！」

優香は腹を抱えて笑っている。こいつの笑いのつばは分からね！

「あは！あは！あははははは！今日も元氣な龍ちゃんです だって（笑）！！」

「うるせーやい！そもそも、何でお前が俺の家にあがってきてるのかって聞いているんだ！」

優香は笑いをこらえて言う。

「いやー、だって、龍ちゃんのお母さんがチャイム鳴らしたら出てきたもんでね……。あげてもらったの！」

おーい！お袋！最後の笑いはそういうことか！……って口笛を吹いてんじゃねー！

ピーピー！お袋の口笛がリビングに響く。鳴り止んだとたんお袋は話します。

「だって、龍ちゃんの彼女なんでしょう。」

お袋と優香は顔を見合わせた。

「「ねー！」」

なんなんだよこの2人は！？

「お義母さんって呼んでもいいですか！？」

「もちろんよ！」

ひゃー！……！完全に話のレールがずれている……。

「んで、優香！用件はなんだ？」

「あは！龍ちゃんれ今日も暑いよね！」

まあ、確かに暑いな！湿度もあるし……。

「龍ちゃん！暑いつていつたら何！？」

「そりゃー、アイスがかき氷だろ！？」

ちつつちつ！と優香は首を横に振る。

「夏に行く所っていつたら！？」

「そりゃー涼しい所だろ！」

優香はおいしい！と言って俺に指を指す！

「その涼しい場所といたら？」

「そりゃー！クーラーのきいた家の中さ」

優香の差していた指の形が変わり、強力なでこぴんに……。おおー痛っ！

「あんた！夏っていったらみんな毎年絶対行く場所があんでしょ！俺はインドア派なので思い浮かばない。」

「どこだよ？そこ？家の中だろ！？」

優香は息を吸い込んで大声で叫ぶ。

「違う！夏っていったら、あんた川に決まってんでしょ！！」

優香の声はリビングの中に響き渡り消えた。

川呪い（前書き）

紅川……。それは、東山を昔から流れる川の名前……。
しかし、龍牙の仲間にも……。確か、紅川は……。

川呪い

（川呪い１）

今日もせみは鳴いている……。俺の中では今日は何も起こらない予定だったんだが！？

そんなこと思ってる俺は今、自宅から数分もかからない川に来ている。

「こんな所に川あったのかよ！？家の裏の用水路の水はこの川からか！」

そんな事言っている俺だが、辺りには誰もいない。みんなお着替えをしているらしい。水着に……。

「久々の川だな……。よし！」

そう言っただけ俺は川の水に足をつけた。

「おおー！ひんやりー！」

俺はここがどんな川か一瞬にして察知した。

「水質はともきれー！川の水はほとんど穏やか！水の温度は今まで行ったことのある川で一番冷たい！生物は、蛍の原形となる川虫、蛙、ニジマス、イワナ、アブラメ、ヤマメなどなど、沢山の生物がいる。時々、鳥が飛んできてその生物を食って、弱肉強食の世界が生まれる！河童さんも是非一度住みたくなる川に違いない！」

パチパチパチパチ！と後ろから拍手の音が複数聞こえる。

「いやー！お見事！龍ちゃんはなかなかいい川センスしているよ！」

「いやいや！いい川センスって、嬉しくねーよ！」

そう、そこにいたのは優香とその仲間達！詳しく言うと、昨日の隠れ鬼のメンバー全員だ！水着姿ではないな……。着替えてたんじゃねえのかよ！

「龍牙くんの独り言には呆れ顔だよ」

ぐさっ！と音がする。

「桜ちゃん！地味に傷ついた！俺の鋼の心でも地味に傷ついた！心が痛い！」

「『あははは！』」

みんなの笑い声が絶えない、幸せな時間だ！こんな幸せな時間なら第1章は永遠に続くだろうな・・・。

「・・・・・・・・幸せか。」

んっ！？今のは天音ちゃんの声だよな！？良く聞こえなかった！

「どないしたん龍ちゃん？暗い顔して！何かあったん？」

りんが心配してくれている！何でもないよな！何でも・・・。

「きつと、龍ちゃんは恋の悩みだな！恋してるんだよ！」

らんは俺をおちよくる！俺が拳をあげたら優香の後ろに・・・！くそー！これじゃあ優香に拳を見せたとたんに三途の川で泳ぐことになるぞ！

「じゃあ、これから泳ぎまくるよ！それじゃーせーの・・・」

よし、この合図でみんな飛び込むんだな！俺も陸に出て！せーの！

「ドン！の前にラジオ体操！、カセットテープ、カチツと！」

ザバーン！

「最初に言えや！それも準備体操ならずラジオ体操かい！」

ラジオ体操の音が夏の川原に響く！

（川呪い2）

外の気温と川の水温が反比例している夏・・・。今、俺はラジオ体操をしている。もう、最後の深呼吸だ。

「スーハー！スーハー！」

そして、再び優香が叫ぶ！

「みんな、あたいに続いて、飛び込むよ！」

優香に続いて、りん、らん、桜ちゃん、天音ちゃんが服を脱ぐ！一瞬、女子の脱ぐ姿を見ておおーと思ってしまったが・・・。当然水着を着ていた。

そして、みんないつせいに飛び込むのだった。よし、俺も飛び込

むか！（突然水に飛び込むと死ぬ恐れがあるし、飛び込みは危険だから、良い子は真似しないでね）」

ザバ、ザバ、ザバーン！

「プハー！水冷てーな！水もきれいだし言うことは何もないな！」
照り続ける日の光……。川に入れば怖くない！部屋の中の次に極楽だ！

「何で人って陸上で過ごすようになったのかな？水中で過ごせばずっと極楽なのに……。」

そのとき、声かした……。

（お前のその望め叶えてやろう……）

「へっ？誰……。ブアッ……。プ。」

誰かが俺の足を引っ張る……。意識が俺の体と一緒に沈んでいく……俺このまま死んでいくのかな……？

意識がない中で呼び続ける。俺の事を……。

「お前がいなくなったときみんなは悲しみます。どうする事もできないでたくさんたくさん嘆くでしょう……。だから、私は謝ります。お前を私がここに落とし入れてしまったから……。」

声は鳴り止まない。俺に再び訴える……。か細い声を振るわせて……。

「同じ過ち繰り返さず、お前が幸せくれるなら私は笑って見過ごします……。この想いお前は分かるのか？どうせ、分からない……。

。お前が行動を起こさない限り……。な……。」

声はまだ聞こえる……。だが、この声は人が出しているのだろうか？きつと違うだろう！？今までの声とは何かが違う……。？分からない。

「あなたの心は分かります。どうせ良からぬ事を考える。どこのいつでもそうだった……。守れる事があるのなら、それは絶対守り

なさい！この願いが一番重要なことから。それが私の望みです。いいですね？海道龍牙・・・」

声は消える・・・。そして、新たな声が響き始める・・・。

「・・・ん！」

「龍ちゃん！！」

俺の意識の深さは再び浮いてきた。

（川呪い3）

俺は気がつくと、目の前に優香がいた！

「龍ちゃん・・・。龍ちゃん・・・。フーフー！」

んっ！？フーフー！？唇に柔らかい感覚が・・・。！！？。

ガバツ！

俺は思わず・・・起き上がってしまった・・・。

「もしかして、優香・・・。人工呼吸を！？」

優香は笑う！

「良かった！良かった！・・・！うわーん！」

そして、優香は泣き出した・・・。優香の目にも涙か・・・。

「へへへ！俺が死ぬわけねーじゃねーか！」

俺はみんなの顔をうかがう。みんな心配してくれていたようだ・・・。

「あはは！良かった！良かった！」

優香は涙を拭いて再び笑う。

「龍牙くん本当に良かったです。」

桜ちゃんは満面の笑みを浮かべる。その隣で天音ちゃんも・・・。

「龍ちゃん！初めての人工呼吸はどうだった？」

りんが笑いながら言った。

「そうだな！柔らかくて・・・唇の感覚がして気持ち良かったな！」

すると、らんが今度は笑い言った！

「なんなら、もつとしてやろうか！人工呼吸！」

「ははは！人工呼吸したのは優香だろ！」

俺の言葉を聞いたとたん、優香が拳を顔面に……。グヘー！

「なんで、あたいがあなたにするんよ！」

えー！違うのか？違うのか？

「だって、俺が見たとき女用の水着をつけたやつだったぞ！なんなら、桜ちゃんか？それとも天音ちゃん？まさかりんか？」

俺は今頃になつて気付く！コスプレ男を……。

「らん！お前……。その水着は？」

らんは笑う！

「似合う？」

うぎゃー！こいつ、もう手遅れだ！

「すまん！これは夢だ！夢じゃなかったら女子が俺に人工呼吸をするはずなんだ！じゃあ、おやすみなさい。」

みんなは俺に向かって言う！

「『それこそ夢だろ！』『』」

グサグサグサー！

「お前ら、人には言つていいことと悪いことがあるって、小学校1年生で習うでしょーが！俺の夢を壊さないで！俺のファーストキスという夢を……！」

しかし、俺が目を覚ましたとき確かに優香が目の前にいたんだが……。

「何が夢よ！何が！」

優香は少し笑いに曇りがある様に見えた……。気のせいだよ……。な？

「優香……。？」

「ん？何、どうしたの龍ちゃん？」

気のせいだよな！

俺は再び笑いの中に入る。

気絶していて、何時間経っていたのか分からないが・・・もうすぐ夕方だと太陽の光が教えてくれた。

（川呪い4）

ザバザバと川は流れる・・・もう、日は西にある。早いなー、1日って・・・。

そう思いながら、俺は川原の石の上にいた・・・。

「あー・・・。なんだったんだろう？」

俺は思わず声に出した。今でも感覚がある・・・。足を引っ張られ・・・。闇の中に引きずり落とされた・・・。奴は一体誰だったのか？
「・・・分らない。」

川のせせらぎの音に俺の声は消えていく・・・。

「龍ちゃん？どうしたの？」

そのとき、後ろから声が・・・。

「ん？ああ、優香か！どうした？」

「どうしたはこっちの台詞だよ！龍ちゃん一人で石の上に座ってるし。」

優香は口をとんがらせて続けて言う。

「それに・・・何かつまらなさそう。」

優香のその表情に一瞬ドキッとした俺。思わず目をそらす。・・・他の奴等が釣りをしている姿が見える。

「いや、何でさっき俺溺れたのかな・・・って思ったただだよ。」

「そうか・・・。」

川の音が俺達の会話の空白を埋めるようにして今は川の音しか聞こえない・・・。

「あたいもあるんだー！この川で溺れたこと・・・。」

優香の声で川の音が消されたみたいに静かになる。

「お前が溺れた？それって誰かに足を引っ張られたか何かか？」

優香の顔に笑みはなく暗い表情で俺を見る。

「龍ちゃんもやっぱり引っ張られたんだ。・・・あたいもだったよ。」

(川呪い5)

静かな時間が何分も経ったかのように同じ景色が流れる。実際1分も経っていないのに……。

「この事件を起こした森田狼は、今どこにいるんだ？死んでるのか？」

優香の目に光は戻っていない……。

「さあー？あいつはその後部下を置いて一人で逃亡したからな……どこで何をしてるのかも分からないよ。」

「じゃあ……？」

優香の目は獲物を睨みつける獣の目に変わった……。

「生きているよ……。森田狼は生きている！」

！！？

「森田狼は逃げる最中に一人の女性と一緒に逃亡していた……。

それがうちのばあちゃんだよ！いしかわ かえで石川楓。東山で一番権力と財政を持

っていた、石川家の一人娘さ！」

そして優香は早口で喋りだす。

「そして、そいつらの間に生まれた母さん……。そこから、苗字の変更が行われた……。ばあちゃんは娘を……。あたいの母さんを売ったんだよ！」

俺は蛇に睨まれた蛙のように……。動けない。

「紅川の苗字を持つ者は汚れとして、一時は家から出る事も許されなかった。この村から出ることもだめだったの！なぜ分かる？」

俺はようやく身動きが取れるようになり、口を開く。

「紅川家が村にとって必要だったとか……？」

優香の目に少し光が戻る。

「はは！龍ちゃん、あんたはやっぱすごいな……！」

そういつて優香の口はまた開く！

「石川家の血は光の神の血らしいの……。しかし、残虐者森田の血が流れていることによつていつ、また暴れ出すか分からない。汚れ神になつたんじゃないだろうか？という疑惑があつた。でも、石

川の血統を受け継ぐ者は紅川家だけ……。あたいらがいなくなる事で村は闇に閉ざされる……。そう思ってたんだと思う。」

優香の顔と太陽とが重なりあつて優香が良く見えない。

「……汚れとして扱われるのに村から出られないって、一番つらいよね。」

！！？

川のせせらぎの音が戻った。

「ごめんね！こんな話して……。この川の名前の由来はいつぱい人が溺れ死んで。川が血の色に染まったらしいの。でも、おかしいよね！溺れて川が血に染まるなんて！アハハ！まったく、笑えちゃうよ！」

そう言つて優香は笑顔で釣りをしているみんなの所に戻るのであつた……。

夕方6時になろうとしていた……。あのと看、太陽で見えなかつたが……。優香は泣いていたんだと思う。

川の音が空まで響き渡っている……。

花火・疑惑（前書き）

川で遊んだ後の龍牙たち・・・。

花火・疑惑

（花火）

太陽はもう半分が沈みかけていた……。一番星がもう輝いている。

ポチャン……。ポチャン……。

同じ時間の感覚で音が鳴る。俺が石を投げているからだ……。

「紅川か……。昔の人の悪霊が取り憑いているのかな？それとも……河童？」

またしても俺の独り言は川のせせらぎに消されていく。

「おい！龍牙くん！こっちにおいでー！楽しいことが待ってますよー！」

桜ちゃんが俺に手を振っている。俺も思わず小さく手を振る。かわいいな……。

「過去を振り返っても意味がない……。か。今と未来を考えていこう！」

そう言つて、俺は石から下りた。

ザバーン！！

下流から大きな水の音！？みんなは気づいてない！？気のせい？

「……っ！？」

気のせいであつて欲しい……。

「龍ちゃん遅いよ！何やってんだよ！」

らんがまともな服装で笑っている。手遅れではないな！ほつとした！

「龍ちゃん！ほら見てみー！これらはなうちらが全部釣ったんよ！」

りんがクーラーボックスの中を見せてくれた。そこには、大きなニジマスやヤマメがたくさん……。

「おっ！うまそうだな！」

俺がクーラーボックスに手を伸ばすと・・・

ビシッ！

「痛ってーな！何すんだよ！」

「龍ちゃん！これは釣った者にしか与えられない魚だよ！だから、龍ちゃんのはなーし！」

優香が俺に指をさす！元気でたんだな！

「何を言うー！そういう優香だって釣ってないだろう！」

すると、優香は自分の小さいクーラーボックスをだして、開けた！
「・・・なっ！？」

そこには、たくさんの魚達が・・・！あんな短時間に釣ったのかよ！

「ぶー！龍牙くんには私の小さなお魚をあげます！どうぞ！」

すると、桜ちゃんは小さなビニール袋を渡してくれた。

「桜ちゃん・・・。気持ちはありがたいんだが、これは、おたまじやくしというものではないかな？」

「かわいいでしょー！お魚ですよ！」

「いやいや、だからおたまじやくしだと・・・。」
ポフッ！

「桜が魚って言ったら魚なの！」

優香の拳が腹に・・・。

「よし、龍牙くんも来たことだしそろそろ始めようです！ぶー！」

いやいや、桜ちゃん！そこは俺を心配しようよぜ！結構痛いんだよ！リアクションも大変なんだから！

「やるって？何を・・・？」

みんなは笑いだす！俺のしゃべり方が痛そうだったからか？

「「花火！！」」

みんなの目は輝きに満ち溢れている！

それから、7時くらいまでみんなで花火をした。楽しい時間だった。特に最後の閃光花火！俺のだけ2〜3秒で落ちた。面白いのやら、悲しいのやら・・・。

帰り道……。俺のぞうりのはなおは切れた……。何か不吉な事が起こる前兆なのだろうか……？

（疑惑）

次の日の朝。2回目の遅刻はせずにちゃんと俺は学校にいた。

「今日は、全校野球大会だな！燃えてきたー！」

クラスのテンション高めの男子、青空が声をあげる！

（そうか……。今日は野球大会か。プリントが配られてたな……。）

俺は机の中に入れたプリントを取り出した。

「学校グラウンド、9時集合！役員は30分前にライン、ベース、その他の道具を準備すること！9時30分より……。キックオフ！」

……。

「キックオフって野球じゃねーだろ！」

一人むなしい突っ込みが響き渡る。

もうすぐ9時になる……。

「りんもらんも優香も桜ちゃんも天音ちゃんも……。みーんな役員ときたもんだ！俺だけ仲間から外されたみたいだな……。」

俺は9時までぼーっとしても暇なのでクラスをうろちよろ。

「……。ん？」

うろちよろしていると、ある机に俺の興味がひかれる本があった。

「>東山100年罰当たり事件の謎く！！？」

俺の手は自然にその本をつかんでいた……。

ペラペラ……。

「この事件は人が何らかの影響で死んでいく……。原因は未だ不明……。この事件は100年前から起こっていた……。」

ペラペラ。

そのときある文が俺の目に飛び込んできた。

「裏山説は嘘である・・・？」

その文を読んだとたん俺は本を思わず閉じてしまった。・・・詳しく読もう！と思ったが本が消えた？というより取られた。

「おいっ！転校生・・・。誰の許可を得てこの本を読んでいるんだ・・・。」

この、声は確か・・・？

「何だよ！読ませてくれてもいいじゃないか！それも俺は転校生という名前ではない！」

そう、そこにいたのは本を片手に持った平泉彩人・・・。俺が一番苦手なタイプだ・・・。

「礼儀知らずには転校生という呼び方があっている。それに、この本はお前には刺激が強すぎる・・・。お前が読んだことでどうせ裏山に行こうなんぞ考えてるんだろ？」

裏山・・・。確かに行ってみたいが・・・。

「行かねーよ！俺は、仲間達と約束したんだ！行かねーってな！」
すると、彩人は鼻で笑う。

「だと、いいがな・・・。」

そして、俺の額に指をさす。

「最後の警告だ！裏山に言っても何もない！ただ、あるものといえは・・・。その後の悲劇だ！」

！！？

彩人はクールに笑いながら玄関へ・・・。

「悲劇・・・か！？」

俺は好奇心が抑えられない。

平泉彩人！確か・・・今日の野球大会の相手ピッチャーだったけな！！？

野球（前書き）

学校行事のひとつ、生徒による野球大会。
楽しむことも勉強です。

野球

（野球１）

午前９時！俺は時間ちよつきりにグラウンドに集合できた！嬉しいねー！

「準備体操は各チームの体操係が中心となって進めてください！」
おっと、いけねー！もうすぐ準備体操か！

先生の声はグラウンド全体に響き渡って聞きやすい！
今日の野球大会は２チームに分かれて行われるんだっけ？そういえば俺のチームの名前は・・・？

「>飛び出せ！龍ちゃんズ！<グラウンドの右端に集まって！準備体操、始めるよー！」

そうか、そうだったか……。そうであつたか……。そうであつてほしくなかった……。何で俺のあだ名が入っとるんじゃー！

「優香ー！いつからそんなチームの名前になったんだよ！」
準備体操係の優香が俺に気づく！

「ありや！言つてなかったけ？先生にも一応報告してあるし！いいんじゃない！」

先生ー！何でOKしとるんじゃー！

「違ーう！そういう問題じゃない！そういうものには著作権がある！そして、それを利用するには著作料金が必要となつてだな！俺はその金をもらつてないし、OKサインもだしとらーん！」

俺は優香に指をさした！が……？

「１．２．３．４．５　６　７　８！よし、最後に深呼吸だよ！」
「……………人の話を最後まで聞けー！」

グラウンドに俺の声は先生と違い響き渡らない。
準備体操が終わり、優香を先頭にみんなはグラウンド中央に集合して

いる……。今日もデンジャラスな1日になりそうだ……。

そして午前9時30分……キックオフ!!（笑

（プレイボールだ!）

日はまだ東の方角にある。

>飛び出せ! 龍ちゃんズ<vs>ときめき! ドラゴンズ<の試合が
今始まる……。てか、前置き長すぎだろ!

（野球2）

始めに言つとく! 俺のチーム構成について……。

キャッチャーはこの俺、海道龍牙……。そして、ピッチャーは最強……。? いや、最恐さいこうの女、紅川優香。あとは、ポジション的にピッチャーの真後ろにいる、天音ちゃん……。あとは、脇キヤラの人達。が俺のチームである……。大丈夫なのか?

対する、相手チームは、プリントを見る限りじゃ……。キャッチャーがクラスで元気一番、青空! そして、ピッチャーは性格以外全て良しの、平泉彩人! そして、ポジション的にキャッチャーの真後ろの桜ちゃん……。そこは、審判だろ! 木下姉妹……。将来、大物になるぞ絶対!……。りんはショート、らんはセカンド! あとはやはり、脇キヤラ!……。あなどれない!

俺達は最初守備としてプレイする! 3回裏3アウトでゲームセツト! 同点の場合、延長戦を行う。

一番バッター! 青空がバッターボックスに入ってきた!

「燃えてきたぜー!」

俺は汗をかいた女子の服を想像することによって萌えてきたぜー! デヘヘ!

ボフツ!?

そのとき、俺の股間に……。男の大事な所に猛烈な痛み……。何!? 何!? 神の天罰!?

「ストライク!」

スッ！？ストライク！？

「龍ちゃん！あんた変なこと考えてたらボール取れないよ！ほら！ボールに集中して！ワンストライクだよ！」

どうやら、青空が空振りしてボールが俺の・・・に当たったらしい！そこ空振っていいのか分からねー！優香は喜んでるが・・・俺には激痛が！

「みつ！みんな、ワンストライク！ワンストライク・・・！気を引き締めて・・・いこう！」

俺は痛さに耐えながら、盛り上げようとする！

ビシュ！

ちよいと待てー！優香投げるの速ーよ！

俺は思わず顔を横向ける！

ドフッ！

「ストライク！」

審判の先生の声が聞こえる。俺の横顔にボールは衝突！先生・・・せめて心配してください！ストライクって！鬼ですか！俺は的じゃないんですよ！

「ツーストライクだよ！あと一球！」

「・・・わーい！！！」

「ボールを良くみる！変化球だぞ！」

「ホームランだー！」

はい！誰一人、俺を心配してませんでした・・・。

「海道くん！しっかりボール見て！」

「秋原もみじ（あきはら もみじ）先生心配じゃなくて、アドバイスカよ！」

なぜかフルネームで先生に突っ込む！美人な笑みが輝かしい・・・。

せみの声は今日も響き渡っている。

（野球3）

ミンミンとせみは鳴いている。ジーンジーンと俺の体のあちこちは痛む！今は2アウト……。今の所、すべてのボールは俺の体に激突ししている。

ボキッ！

「ストライク！バッターアウト！」

ほら、やっぱり当たった！効果音もおかしくなってきたし……。俺の体壊れた！？あはははは！何で笑ったのかもわかんないや！

「ほら、龍ちゃん！あんた一番バッターだよ！」

優香の声が聞こえる。体の悲鳴と共に。

「いっちよ、やってやるか！」

そういつて、ヘルメットとバットを装備(?)した俺はいざ戦場へ足をはこんだ。動かたばに痛いんだが……。!?気のせいだよな!?

「平泉彩人！ここで会ったが109年目！勝負だ！」

俺はそう言つてバットを彩人に向ける！

「ふん、面白い！返り討ちにしてくれるは！」（龍牙の空想である。）

よし、燃え、燃え、萌えー(?)

彩人は大きくふりかぶつて投げた……。ふん！俺にはこんな球スローに……。!

ビシュ……。ドン！

「ストライク！」

見えねー！うん、あきらめよう！この勝負負けだ！

「こらー！龍ちゃん！腰がはいつとらん！腰がー！」

ベンチからは優香の声が……。!そうだ、俺あきらめないよ！ボールが速ければバットのスイングを速くすりゃーいいことだ！いくぜ・

ズババーン！

「……。!?!?」

なんだよその戦隊者の怪獣が爆発する音は……。!?!?あきらかに現

実とはかけ離れとるがな！？

「スッ！ストライク！」

審判の反応からしてすごすぎるこの球は・・・！てかつ！おかしいだろ！球がおかしいのか？それとも彩人の肩！？

「言い忘れたが、俺の球のスピードと多彩な変化球を打てる確率は・・・。0に近い。」

かー！むかつくー！なんなんだよ！なんなんだよ！何を言い出すかと思えば自慢かよ！ムカムカイライラ！

そして、第3投目が繰り出される！

「うおー！ー！ー！」

ギュルルルルルル！

「なっ！？何！？曲がっ・・・た！」

「ふん！だから言っただろ！0に近いと・・・。」

ブン！

「ストライク！バッターアウト！」

ものすごい空振りの音の次に先生の声が響き渡る！

「「「ヤッター！！」」」

と相手は喜んでいる。

「「「・・・。」」」

こっちはドンマイのドの声も出ないほど啞然としている・・・。

せみの合唱が俺達のチームを馬鹿にしているようにうるさくなる・・・。

（野球4）

カンカンと太陽が照りつける。もう、時間は進んで3回表・・・。

俺達のチームは絶大なピンチを向かえていた。ノーアウト満塁という・・・。

「優香ー！やっぱり足首が痛いのか？」

俺はピッチャーの優香に向かって叫ぶ。優香は先程の打席でボールを打つものの・・・足をくじいてしまった。ピッチャーを続けるも

の、失速した球・・・切れのない変化球を次々と打たれていき。
満塁に・・・。

それも、不運なことに次の打席は平泉彩人・・・ホームランを
打たれる可能性が高い・・・。

「龍ちゃん・・・！あとはあんたに任せた！ピッチャー交代、海道
龍牙！あたいはキャッチャー！」

優香の声がグラウンド全体に響く！さすが学級委員長！

そう思いながら俺は、大きく深呼吸をしてマウンドにあがった。

こう見えて俺は、球のスピードには自身があるんだ！優香にも、
このことは話してあったからな！

ブンブン！

バッターボックスに彩人が入ってくる。バットの素振りの音からし
てやばい！

「ひつひつひ！彩人ー！お前は俺の球は打つことができん！俺の球
の速さに膝まづくがいい！」

「ふん！お前にそんなことができるわけがない。」（龍牙の空想）

うおっし！燃え！燃え！萌えー！

「龍ちゃん！速くなくてもいいからね！打ちにくいところを徹底
的に狙うんだよ！」

優香の声が聞こえるが・・・俺には蠅のブーンの声にしか聞こえね

ー！なんとって、俺の球で終わるからだー！

「うおおおおお！」

俺は構えて投げた！叫び声は球と一緒にキャッチャーミットへ！

びゅん・・・ボフツ！

・・・・・・・・・？

あれ！？ボフツ！？キャッチャーミットってそんな音したっけ・・・
？

分かった！俺の球がすごすぎたんだ！

「レッドボール！」

・・・ん！？先生！今何か言ったか！？

そのとき、優香が俺のそばに走ってきた！

「龍ちゃん……。あんたに頼んだあたいが馬鹿だったよ！」

そう言つて、俺にキャッチャーミットを渡す……。

「海道くん！いくら軟式だからって人に当てるのは、危険ですよ！

大丈夫ですか、平泉くん！」

「はい！なんとか……。」

先生の声が聞こえる。彩人の声も……。俺、やっぱり当ててしまったのか！

……。

先生！俺の時は心配も何もしてないだろー！

こうして、俺はまたキャッチャー！優香がまたピッチャーでなんとか3回裏へ！

まあ、相手に1点を与えたのには変わりはない。

次の俺の打席で1点取り返そう！

せみは一段とうるさくなる。

（野球5）

時は流れて3回裏……。2アウト……。>ときめき！ドラゴンズ< 1 - 0 >飛び出せ！龍ちゃんズ<。これで俺達が点を入れなかったら俺のチーム……。>飛び出せ龍ちゃんズ<は負けてしま……。なんと少しでも1点は入れないと……。！

「俺の出番か……。！」

俺の打席が回ってきた……。！ここの一番の男の見せ所か……。！狙うは……。

「……。ホームラン！」

俺の独り言が初めてかつこよく聞こえたときだったかな！？ブンブン！

俺は素振りを2回すると、バッターボックスへ！

バットをピッチャーに向けて、シャツを少しめくる……。

「さあ、こいつ！」

俺の声はマウンドまで届いたらしく。彩人は冷酷な笑みを見せる。

そして、彩人は構えて投げる！

「うおおおお！」

しゅぴん！

ぶん！

「ストライク！！」

1球目は空振り！ぐっ！やはり変化球か！

俺は心を落ち着け、再び構える！

彩人は帽子をかぶり直し再び投げる！

カキン！

当たった！？が、ボールはファール！

「ちっ！」

彩人が舌打ちをする。どうやら、俺に打たれたのが悔しかったらしい！

だが、これで2ストライク！投手有利なカウント！俺は不利を憎めない！

「これが最後か……。当たっても当たらなくとも振り切る！」

そう俺は独り言をつぶやくと、ボールは飛んできた。

「うおりゃーーーーー！」

かきーーーーん！

今までとは少し違った感覚……。これは……。？

「ボールは……。？」

みんなはボールの方向を指差す！そこは……。？

「龍ちゃんすごいねー！まさかの場外とは……。！」

「うん、素晴らしいです！場外ファール！」

俺の球は見事に場外のファール！それも、打つ向きとは逆向きの方
向に！

「ファールで誉められても嬉しくねえーよ！場外ファールってなん
なんだよー！」

俺の声はグラウンドに響きわたった！

結局その後俺のチームは負けた・・・。

後片付けはもちろんみんなで・・・。

「あーあ！結局負けちゃった！」

優香がわざと俺に聞こえる声で言う。

「悪かったねー！場外ファールで！ボールでも探してきて記念にとつておきますよーだ！」

すると、近くにいた天音ちゃんの顔色が変わる。

「・・」

・裏山！

「えっ！？」

そうか、俺が飛ばしたほうって、裏山か・・・。

俺の心に良からぬ思いが芽生えはじめた。

みんなが約束守るなら、俺も約束守ります。

守りたい。守りたい。けれど、俺は・・・。

ごめんなさい。

詩題名＞約束く 作者 海道龍牙

迷い・戸惑い・決意・裏山・目覚め（前書き）

主人公、海道龍牙がついに罪を犯す…。

迷い・戸惑い・決意・裏山・目覚め

(迷い)

明くる日。俺は学校を休んだ。わざわざ仮病をして。

「・・・今日こそ真相をあばいてやる！」

俺の独り言はむなしく、かつこよく消えていく。俺は、今日・・・行く！裏山へと。

「怖くない・・・。俺一人裏山の謎を知らない方が嫌だぜ！俺が一番怖いのは・・・」

少し間があいて、再び俺は独り言を呟く。

「・・・仲間がいなくなる事だ！」

少し声がかすれる。裏山へ行けば裏山の真実がきつと・・・。俺は眼から落ちてきた何かを服の袖で拭く。

きつと大丈夫・・・。俺なら死ぬもんか！100年罰当たり？そんなもん怖くねー！海道龍牙・・・ならいける！

「いけるよな・・・！」

自問自答・・・。寂しくはない。

ピンポン

家のチャイムが響く・・・。

「誰？」

俺の体は本能で拒否する・・・。このまま待っていればいつか引き返してくれるだろう・・・。

「・・・早くどこかへ行ってくれ。」

俺は小声で呟き祈る。

ガチャン

・・・だが祈りは一瞬にして消えた。

「海道龍牙ー！いるんだろー！わざわざ隠れなくても分かってる。」

俺の体は動かない。足の震えが止まらない。

玄関を開けた！？

(怖い・・・?)

「あがるぞ！いるのは分かってる。」

声の主は家にあがってきた。誰なんだ？この声は・・・。

・・・足音が近づいてくる。

「海道龍牙だな。・・・警察だ！」

「・・・！！？」

警察？こいつは・・・警察。

背が高くて・・・。ハンサムで・・・。何か怖い・・・。

「俺は富山健とみやま たける・・・。東山警察の上官として働いている。」

こいつには笑みがない。笑みのない自己紹介・・・。暗いわけではない・・・。ただ何かが怖い・・・。

「・・・海道龍牙・・・です。」

「何だ・・・。喋れるではないか。」

「当たり前喋れる。・・・警察が俺に何の用だ？」

すると、富山は一段と鋭い目つきになり、煙草を取り出す。

「お前も吸うか？」

「俺の質問に答える・・・！それに、家の中で吸うのは普通遠慮するんじゃないか？」

俺の震えは未だに止まらない。

「上司に口をきくときは今は敬語を使わないのか・・・。おかしな世の中になつたな・・・。」

富山は遠慮もせずに平気で煙草を吸っている。

「・・・すみません。」

なぜだろう・・・？こいつに逆らうといけない・・・何か起こりそうな気がする・・・。自然に俺は謝ちまった。

「ここに来たのは・・・。単刀直入で言うと・・・。」

何十秒も間があいたような気がする。たった数秒なのに・・・。

「・・・大川十流が死んだからだ。」

おお・・・かわ・・・。とう・・・。る？

俺の頭の中には悪い記憶が再び蘇る。数日前に会ったあいつの記憶

「・・・まあいい！・・・いつとくが別に俺はお前を疑っているんじゃないぞ！」

「じゃあ、何で？」

俺が問いかけると富山は自分専用の灰皿にタバコを捨てる。少し間があく。

「ここ最近、大川に会ったのが・・・お前の親父さんだからだ！」
「・・・えっ!？」

俺は驚きが隠せない。そんは、親父が大川に・・・?いつ?どこで?何であんな奴に?

「海道龍一・・・職業不明・・・こいつが最後に大川に会ったのが・・・一昨日の深夜・・・この時間帯的に仕事帰りか何かだな・・・」

「ちよつと待つてください!人違いだろ!俺の親父が大川なんかに会うはずがない!」

俺の叫びは窓ガラスをも震えさせる。そして、俺の体も震えが増す。そうしてる中、富山は自分のかばんから小型ノートパソコンを取り出した。

「路中のビデオカメラの映像だ!・・・これが大川のバス!・・・ここで、一時停車をする。・・・そして停車した時に人影が見える・・・」

そうやって富山は説明をするが・・・この人影はどう見ても、親父だった。

ガタガタ・・・。

震えが止まらない。・・・何故だろう?あの時・・・バスで東山に来た時に・・・親父はもしかして・・・
殺人計画を立てていたんじゃない?・・・?

俺は親父を疑ってしまう。

「警察はお前の親父を指名手配中。」

親父が・・・?そんな・・・?

「・・・ありえない。」

「・・・ん？」

俺の口が勝手に動く。自分でもびっくりしている。何を根拠にありえないのか自分でも分からない。

・・・そして、また俺の口が動き出した。

「ありえないんだよ！・・・親父が例え犯人だとしても・・・死亡時刻も12時間以上経っている！」

俺は次々と口走っている！なぜだかとても・・・怖いのに。

「それに、少ない外傷なのに殺人を犯すことじたい難しいだろ！」
俺の叫びの後は静けさが戻った。

静けさが戻ると富山は再び、口を開く。

「薬物を使えば別だ！」

くそ！警察めー！くそくそ！大嫌いだ！ここまで親父を犯人にしたのかよ？

「くつくくくくく！ふっはははははは！」

なぜだろう・・・。俺は笑ってしまう。前もこんなことなかったけ・・・？

「何がおかしい？」

富山は表情を変えずに俺に問いかける。・・・腹の底からむかつく野郎だ。

「むかつくよ！警察の中でもお前は一番むかつく！・・・だから言ってやるよ！」

そして、俺は立ち上がって大きく息を吸って叫んだ！

「お前らの捜査じゃ！絶対、100年罰当たりの謎は解けない！・・・解くことができない！・・・俺が裏山に行って、全ての謎を解き明かしてやらあー！へぼくそ警察野郎が！」

ほぼやけくそだった！たが叫ぶことによって怖さは消えた。

ガシャン！

玄関へ逃げて・・・外に出ても逃げた！富山が追って来ると思ったから！

だが、富山は追ってこなかった・・・。

「行く・・・か！」

独り言はまたむなしく、かっこよく消えた。俺の足は裏山へと進み出した。

（決意）

日の光がじりじりと照りつく夏・・・。もう秋とも言ってもいいのかな？木々の葉はもう緑から違う色へと変わりつつある・・・。

「・・・着いた。」

俺の眩きを消してくれるせみ達・・・。嬉しいのか寂しいのか分かんなかった。ただ、俺一人なのは変わらない。

そう、俺は一人、月光寺の階段の下で寺を見上げてるのだ・・・。
「はー・・・。」

ため息ではない・・・。深呼吸をただけだ！と自分自身に言い聞かせる。どう聞いてもため息にしかないのに・・・。

トタ・・・トタ・・・。

俺は階段を１段ずつ上っていく。寺からは２時の鐘が鳴り響きはじめた・・・。

・・・この鐘が何かの始まりを告げているのだろうか？

「・・・！！？」

俺は階段を上り終えて気づく。

（月光寺か・・・。この前来た時は何も感じなかったが、すげーきれいだな・・・。月光寺が太陽に照らされ金色に輝いてやがる。）
どこのどんなきれいな場所よりもきれいだ！まさに日本の美とも言えるだろう・・・。

だが、やはり・・・きれいな場所にもあるんだな。俺の目的の汚い場所が・・・。

寺の端にある立ち入り禁止の１本道・・・。裏山への道が・・・。
忌々しく（いまいましく）あるのだ。

「行かないと・・・！おいてかれちまう。せつかくできた仲間に・・・

「友達に……。俺の宝物に……！」

俺は足を進める……。裏山へ……。身を潜めながら……。

「あーあ！行っちゃうのね……。信じてたのに……。」

！！？

後ろから声……。見つかった……。？

「……。君は、あのときの？」

俺の後ろにいたのは……。仮面の少女。バスの窓から見えた……。フードと仮面を着けた少女……。あのときのままだな……。

「お前が行きたいなら好きにしろ……。私は止めはしない。言っても無駄だからな……。」

少女は仮面の隙間から冷たい目線で俺を睨む。

「……。……。……。……。……。……。……。……。……。」。――

俺は言葉が出ない。金縛りにあつた様に動けない。

「……。お前の甘えがそうさせたんだ……。根性なしが。」

なぜだか少女の言っていることが分からないのに心が痛くなる……。なぜだろう？

「私がかんばったところでお前の力がなければ意味がない……。！もう、すべてがおかしくなる……。」。――

「……。……。……。……。……。……。……。……。……。？」。――

「これもすべて、お前が甘えすぎたせいかもしれない……。じゃあな、根性なしの馬鹿者が！」

そう言つて、少女は去っていく……。

「俺の甘えか……。」

俺の心は揺れることもなく……。裏山へと足を進めた……。！

（裏山）

ガーガー！

かれた鳴き声のカラスがバサバサと飛び立つ。

俺は今、裏山にいる……。もちろん、一人。

「裏山か……。確かに、薄気味悪いがな……。ここで、人が死

ぬのか？」

裏山は人気がなく、風と木々が揺れる音、動物達の鳴き声が響き渡っている。

「これは、ただの肝試しに近いな！確かに夜に行ったらこえーけど、太陽が照っている内は全く怖くねー！」

俺は一人・・・！心細かったが、怖くはない！むしろ、みんなは何を怖がっているのかが分かんなかった。

「・・・よし！」

そうして、俺の足は自然に奥へ奥へと進んで行く。

・
・
・

あれから何分経っただろう？奥へ行っても、同じような景色が広がっていた・・・。辺りは日が少し沈み始めて暗くなる・・・。

「結局何もねーじゃねーか！来て損した！やっぱり裏山説は嘘だったか・・・。」

俺は、そう言っで、元来た道を戻り始める・・・。

骨折り損のくたびれもうけってやつだな・・・。

「あれ・・・？ここ通ったけ？」

そう思っていた俺だがどうやら、道を間違えたようだ・・・。次は逆の方に行く。

「・・・？」

あれ？こつちでもない？

どうやら、迷っちまったようだ・・・。こついう時は360度見渡

すと・・・！？

「あつた、あつた！」

やはり、あつたな道が！

・・・俺はそこまで猛ダッシュする！だが・・・？

ボタン！

「・・・痛って！」

何かにつまずく……。一体何だつてんだ？こんな所に……。？
そうして俺はその何かを見た！それは……

「……うわー！ー！」

俺の目はおかしくなっちゃったのか……。？俺の目の前には……。
木の根でも、小石でもなく……。何かの障害物でもない……。
人だったのだ……。！血だらけの……。

「えっ！？何だこれ？目の錯覚？」

ゴシゴシと目をこすってそれをまた見る。

「……………」
「……！？」

消えない……。本物だ！間違いなく本物だ！

俺はここから逃げようと立とうとした！……。だが、腰が抜けて
立てない。

血だらけの人は動かない……。死んでいるようだ……。

「……傷がない！？」

俺の目は今日は真実を写してくれないのだろうか……。？死体には
傷が……。血が全体から吹き出しているのに、多きな外傷がない
のだ……。

「助けて……。助けて……。！」

俺の叫びは山びことなって響く。人氣がないのに助けを求めても無
意味……。

ずしゃ……。ずしゃ……。

落ち葉を踏んで近づいてくる足音が聞こえる……。

耳までおかしくなったのか……？

すー！

俺の意識は……。暗闇へと消えていった。

（目覚め）

夜……。俺は自分のベッドに眠っていた……。時計は9時に
なろうとしている。

「えっ・・・？裏山は？」

何が起こっているのか分からない。記憶が・・・。記憶が飛んでいく・・・。

「えっと・・・確か、裏山に行つて・・・。」

そう言つて俺の頭に漢字2文字の言葉が浮き上がる。

「・・・死体？」

・・・思い出した！裏山で見た物を・・・。

「あの時の死体は・・・？例の100年罰当たりの・・・？」

傷はなく・・・。血が大量に・・・。

「思い出せない・・・。あ後の事が・・・。俺はどうやって家に帰つて来たんだ？」

俺の声は外の暗闇へと吸い込まれる。

ガタン！

その時、下のリビングから物音・・・。

「この時間に親はいないはずじゃ・・・？」

気になった俺・・・。いや、怖い俺は近くにあった、工作用力タ―を持って、こっそりと階段を下りる。

ひたひた。

リビングの前まで来た。

「ゴクリ・・・。」

唾を飲んで・・・。リビングのドアを勢いよく俺は蹴り開ける・・・。

バターン！

少し、勢いが強過ぎて、ドアが開くどころか倒れっちまった。

「・・・誰だ？」

そんな事、俺は気にせずに叫ぶ・・・！

「あら・・・。龍牙じゃない・・・？どうしたの・・・？」

そう。そこにいたのは、お袋だった。何か雰囲気が違う・・・。

「お前・・・誰だ？」

俺はそいつに力ッターを向ける。

俺の問いに驚きを隠せない、そいつ……。カッターに怯えているのか……？

まあ、どっちにしろ、こいつお袋じゃない！？

「お袋じゃないよな！」

「……………」

ふふ！

そいつは不気味に笑うだけ……。特に何もしようとはしない。

「俺の質問に答えろ！お前は誰だ！？」

「あなたのお母さん！って言えば分かるかしら？きつひひひ！」

そいつの笑いはまるで……。悪魔のようだった。

「お袋じゃねーだろ！」

「そっ、じゃなかったら？」

「殺す！」

俺の声が反響する。

「じゃあ、仕方ないわね……。きつひひひひ！」

そいつは、そう言うと、台所に足を進める。

ガチャ！

「きつひひひひひひひひひひ！」

そいつは包丁を取り出した。不気味な笑いと共に……。

「何をする気だ！」

「お前を殺すんだよ！キツヒヒヒヒ！」

包丁を持ったお袋……。いや、お袋の姿をした悪魔は俺に近づいて来た。

「殺せないよ！」

今頃気づく……。こいつはお袋本人だ！悪魔に心乗っ取られているんだ！だって、指輪をつけている！世界に1つだけの親父が作った、指輪を……。

「お袋……！」

悲しみは……。始まった。

夢・夢の夢・盗聴・登校・逃走（前書き）

親と仲間・・・。

あなたはどちらを選びますか？

夢・夢の夢・盗聴・登校・逃走

(夢)

ざー！ー！ゴロゴロ！ー！

辺りは豪雨。いつの間にか雨が降り始めたようだ・・・。

俺は、家の中。雨の音だけ家に響く・・・。

リビングは暗闇・・・。何が起きているのか分からない・・・。

ゴロゴロ！

雷が・・・光って、近くの何かに落ちる。

「・・・赤い!?」

一瞬見えた・・・。リビング全体が赤く染まっている。

ゴロゴロ！

「・・・うあー！ー！ー！」

2回目の雷の光で見えた・・・。赤く染まって・・・横たわっているお袋を。

「俺が・・・やったのか？俺が・・・お袋を？」

ゴロゴロ！

雷の音が俺の質問に答えているようだ・・・。

「・・・そんな？・・・嘘だろ!?」

俺の手には、大量の血がついた包丁を握っていて・・・服には返り血がびしゃり。

「何で!? どうして!? 記憶が曖昧あいまいだよ！思い出せよ俺！！俺は殺しちゃいけないよな！」

誰も答えはしない・・・。

「・・・キツヒヒヒヒヒヒヒヒ！」

雨の音がさつきまでの悪魔の笑い声に聞こえてくる・・・。

「怖い・・・。怖いよ・・・！」

ガタガタ・・・。

再び俺の体は昼間と同じように震える・・・。

ガチャガチャ！

いきなり玄関からの音……。ドアノブを回す音だ。

「……誰だ！？」

俺は勇気を振り絞って、玄関まで出てみる。

ガチャガチャ！

「だっ！？……誰だ！？」

鍵がかかっているドア……。

それを開けようとするのは何者なのだろうか？ただ、ひたすらドアノブをひねって開けようとする……。

ガチャガチャ！

再び、ドアノブが回りだす……。

ジャラジャラ！

俺は、ドアにチェーンをかける……。そして……がちゃり。ガチャ……。

震える手で……。鍵を外し、ドアを開ける！

「誰だ！！」

俺の声は、チェーンとドアの隙間に吸い込まれる！だが……辺りはシーンとしている。

「……………！！」

！？」

隙間から覗^{のぞ}いてみても……。誰もいない……。

俺はほっとするとは裏腹に怖さが……。

「誰もいないのに、一体誰が……？」

不思議に思いながら、ドアを閉めて鍵をかける……。

そして……リビングに戻ろうと後ろを向く。

ガチャ……。

「……………！！！？」

ドアからまたおかしい音……。

俺は再びドアの方を見た。

シーン！

俺は木と会話ができるようになったのだろうか？・・・それとも聞き間違い？

そわそわ！

俺の心が急に落ち着かなくなる・・・。

どうやら、昨日の事を思い出してしまったようだ。

「お袋は俺が殺しちまったんだよな・・・？俺が・・・お袋を。」

自然と乾いた目から涙が落ちる・・・。まばたきを忘れるほど自分でも驚いている・・・。

「・・・学校。」

今日は何曜日かも忘れてしまった。だが、学校だということは分かる・・・。

「学校に行かないと・・・。俺がお袋を殺してしまったことがばれちまう・・・。」

俺は、そう言ったが自分の格好を見ている・・・。

「私服で・・・血が大量に・・・。」

昨日の事件で・・・俺の服は血とドロだらけ・・・。制服でもないのだ。

「家に帰らないと・・・！」

そう言つて、俺は裏山から家への道を探し始めた・・・。

・ ・ ・

案外、早く見つかった！家までの道が・・・。

「昨日、家から必死に逃げた時に偶然見つけたんだよな！」

そう言いながらも、ここからやはり家まで、7、8分かかる程度だ。近いとは言えないであろう・・・。

「ここの、角を曲がったら・・・見えた、見えた！」

そう、見えた！家と赤いチ力チ力する何かが・・・。

「・・・パトカー！？」

家まであと十数メートル・・・。警察の声も無線の声も聞こえてく

る・・・。

確か、俺の家には・・・お袋の死体が・・・!?
俺は、今日、警察からの逃亡者となった・・・。

(盗聴)

朝、太陽の光はさつきより強くなっている・・・。

そんな中、俺は身を潜めている・・・。自宅の横で・・・。

何でかって？そりゃ決まっているだろう！警察に見つからないため
さ・・・。そして、警察の盗聴でもある・・・。いわば、スパイみ
たいなもんだな・・・。

「ガガ・・・、どうだ？犯人は見つかったか？」

「こちら、草木です！犯人、未だに見つかりません・・・。」

そんな、無線での警察のやりとりが聞こえる・・・。犯人はここに
いるのに馬鹿だな警察って・・・。

「富山さん！死体見つかりましたー？」

「いや、みつかってない・・・。早い所見つけるぞ。」

(あれ？富山って昨日の？・・・ってか、ちよつと待て！死体がない
ってどういうことだ・・・?)

「富山さん！ちよつと来てくださーい！」

「何だ？どうした？」

家の中は騒々しい・・・。あつたのか？死体？

「これは・・・血!？」

「本部、本部！家の中に大量の血の跡発見・・・。海道かよのだと
思われる！」

>海道かよく・・・。俺のお袋の名前・・・。

「ガガ・・・ガ、何？直ちに調べろ！」

今頃だが何で、俺盗聴なんかして、逃げないんだろ？警察の会話が
おもしろいからか？

「草木！昨日の犯行は何時ごろだ？」

「はい、確か、夜の10時頃だと思われます！」

「死体が見つからなかったら、どんな風に殺されているか分からない！」

誰が死体を動かしてくれたのか分からんが助かったと言えるだろう・・・。ありがたい！」

「富山さん！一回、署に戻りましょう！資料とか取りに！あと、応援も呼びましょう！」

「・・・ああ！」

警察は家から出てくる。

「海道龍牙。」

そう言つて、パトカーは行つてしまった。

「制服に着替えるか・・・。」

俺は犯人・・・！だが、そんなのバレなきやいい！見つからなきやいい！仲間と・・・。俺の大切な宝物と一緒に笑いあえればそれでいい！

お袋は俺を殺そうとしたし、親父は殺人を犯した・・・。

「親は悪魔でしかなかった・・・！」

俺はそう言い、悪魔の住んでいた、家へと入るのであった・・・。

（登校）

ガラガラ！

教室でドアの開く音がする！子供達の笑い声。懐かしい学校だ。

「みんなー！おはよう！」

俺はもうなれたクラスに大声で挨拶！声がクラス全体に響く。

「・・・龍ちゃん。」

少し暗めの声が返ってくる・・・。そして、俺の回りをみんなが囲む。

「どうした？優香？こんなに天気がいい日は元気出さないと！」

そう、暗めの返事をしたのは優香だった。いつもと少し違う紅川優香・・・。

しかし、優香だけが暗いわけではなかった。よく見れば、りんもら

んも桜ちゃんも天音ちゃんも彩人、そしてクラスの男子も女子も暗い表情……。てか、怖そう。

「みんな……。どうしたんだ？腹でも痛いのか？」

すると、みんなはさらに顔を下に向け、優香は俺を見つめる……。

「……。龍ちゃん！！！」

いや、違う。優香は俺を睨んでいるんだ。まるで飢えた獣のように……。

「な、何だよ！俺は何もしてないだろ！」

俺がそう言つと、クラスにいる全員が顔を上げ、俺を睨む……。

（ば……。れ……。て……。る？）

急に俺の体から大量の汗……。

（落ちて着け俺！落ちて着け！）

「殺せ……。こいつらを殺せ……。」

そんな、声がどこからか聞こえる……。

（どうする俺？どうすれば……？）

すると突然。

「今日は、みんな予防注射なので怖いのです！ぶー！」

この雰囲気の中、かわいい声が鳴り響く。桜ちゃんだ！

「そうそう、今日は注射やった！」

「りん姉！怖がつているだろ……？」

りんもらんも弾んだ会話をしている。

「ふん……。転校生。何を怯えている。注射がそんなに怖いのか？」

彩人もむかつくがこの雰囲気壊す。

優香も目つきが変わり、いつものスマイルで喋りだす。

「龍ちゃん！困った時はあたい達に相談してね。」

クラスのみんなも顔を上げて笑い出す。

俺は今頃になつて気づく！

（友達は困ったとき相談しても大丈夫！）
今まで気づかなかつた俺が小さく見える。

「おう！ありがとう！」

みんなの笑顔が輝き始める。

「ところで、龍ちゃん。裏山に行かなかった？」

突然の問いかけ……。優香からだ。

「……いや、行ってない。」

優香の目はまたさっきの目……。怖い。

「……本当に？」

「……あ！……ああ。」

俺は少し自信がなさそうな返事をしてしまった。優香の目はさっきと変わらないまま。

「……優香。」

天音ちゃんが、優香の肩を軽く叩く。

「……あつ！ごめんね！あたいつたら何やってんだろ！あはははは！」

優香はごまかすかのように笑い出す。

俺はここに来て、怖い思い……。狂った事がたくさん起こる。

俺のそんな不安は消えようとしなない。

（逃走）

刻々と時間は進んでいく……。もう、朝の10時……。予防注射の時間だ。

「次の人！どうぞ……。」

保健室前の廊下で俺達は無言で並んでいる……。

ひそひそ……。

無言ではないな……。耳をすませば、どこから小さな声が聞こえる……。

「……い道くん、かわいそうだね。警察に追われているんだっけ……。」

「そうそう、……なんだよね！」

そんな女子の会話は耳をふさいでも聞こえてくる。

（俺はいつまでここにいれるんだろう？）

そんなことも考え始めた・・・。そのとき

「海道くん！」

廊下の向こう側まで声が響く！

「えっ・・・？はい！」

俺は慌てて返事をする！・・・声の主は先生。

「海道くん！気が動転しているのは分かります！先生も一生懸命、かばってあげています！ですが、今は予防注射の時間です！みんなと一緒に行動しないとあなた自身が苦しみますよ！」

俺の心の中と廊下に声が響く！

「はい。すみません。」

思わず謝る俺・・・。先生の顔に笑顔が戻る！

「だから、次はあなたの番ですよ！予防注射！ちゃんと名前呼ばれたら返事をして立って！はい！そして、保健室に入ってください！」

先生に無理やり、立たされ、保健室に入る。

ガチャン！

入ったとたんに保健室のドアに外側から鍵がかかった。・・・何で？

「海道くんだね！椅子に座って！」

奥の方から声がする・・・。俺は、声のする奥の方に足を進める。

「あなたは・・・？」

「見てのとおり医者だよ！」

見てのとおりっていわれても、体はでかいし、顔には傷だらけ、そして目つきがとてつもなく悪い。医者にはとうてい見えない。むしろ、ヤクザだ！

「怖がらなくてもいい！私は君の味方だよ！」

そいつって、そいつは目の前の椅子を指さす！

「とりあえず座ろう！すぐに終わる！」

「嫌だ！」

！！？

自分でも驚いている！反射的に口が動いたのか？俺の意識とは別に

口が勝手に動きやがった！

「そうか、やはりこれをしなくてはいけないようだな。」

医者^{イサナ}の姿をしたヤクザがさういうと、保健室のベランダから5、6人のスーツを着てサングラスをつけているいかにも怪しい奴らが現れた。

「なっ！何だよ、お前ら？」

俺の問いかけを無視して、そいつらは俺の腕やら足をつかみとる！

「ぐわ！やっ！やめろよ！何すんだよ！」

そうして、俺が身動きとれなくなったら、医者^{イサナ}の格好をしたあいつがバツクから何かを取り出した。

「・・・裏山に行った人はこうなってもらうしかないんだよ。」

そう、あいつが取り出したのは、注射器。・・・普通に見えるが、中の薬品の色が怪しい紫色で濁っている。

「何だよ、それ！あんたは俺の味方ってさっき言ったのはやっぱり嘘だったのか！」

だが、医者^{イサナ}もどきはニヤリと笑って、俺の腕をつかむ！

「やめろーーーーー！」

声が保健室全体の薬^{イサナ}ビンを振動させる。

もうすぐ、昼になる。太陽がまぶしく輝いている。

影・解・散る・罪・最期（前書き）

第一章ついに完結・・・！

影・解・散る・罪・最期

(影)

気づけばまた裏山……。記憶がふつふつと蘇る。

あの後、俺はスーツ姿の奴等を力ずくで押しのけた。保健室全体は、薬ビンや窓ガラスやらが割れて、ぐしゃぐしゃに……。その後も奴等は、俺を捕まえようと必死になって、俺の服や体をとてつもない力で押さえたんだ。

俺の服はほわもうボロボロ。俺の体には所々にあざができている。

奴等は、きつと俺にどうしてもあの薬品を使いたかったらしい。
・新薬か何かだろう。どうして俺にかは分らない。
奴等は数が多い！でも俺は奴等に対抗した！

どうやってかって？決まっている！刃物だ！偶然ポケットに入っていた、カッターナイフで、俺を掴んでいた手をグサグサと……。そのせいで、俺の白かった制服は今や赤黒く染まっている。

気がつくと奴等は、うめき声をあげて全員倒れていた。けっこー傷口は深かったからな。そこをすかさず俺は逃げてきた。この裏山へと。

「何故だろう？前まで薄気味悪いと思っていた裏山が、居心地がいい。」

そう思っている俺。少し思い出したことがあった。

「そっぴや、奴等は、裏山に入った奴はあの薬品を注射されるとか言っただけ……。あの薬品は一体何なんだろうか？」

分からない。色からして怪しい薬品だったのは確かだ。じゃあ、裏山に行ったことのある奴は全員注射されたんだらうか？

「優香の話し方からすれば、あいつも入ったことあるよな！……。確が行ったことある奴は死ぬんじゃないかったけ？じゃあ、優香は行

ってない!？」

頭がこんがらがってきた。一回、頭の中を整理しよう!

「俺も裏山に入った。てか、今入っている。今まで3回入った。確かに殺されそうになったり、不思議な事が起こっている。人が人でなくなっているのも今時点で分かっている。だが、俺が今年で100年罰当たりを止めないと!」

かつこよく響くが、何のために俺はここまでして罰当たりを止めたか? と思っっているのだろうか?

「待て! そもそも、優香が行ったことあるなんで聞いてないな! きっと仲間だったら言ってくれるはずだからな!」

あと少しで、答えが……。100年罰当たりの謎が解ける! あと少しのトリックが解けない!

「ここに来て、何日が経っただろう? きっと、俺がここまで必死に謎を解こうとするのは、引越してくる時に見た夢のせいかな……。」

小さな少女が俺に助けを求め、詩を聞かせてくれた。

「幸せをつかむために、不幸も経験する……。か。」

不幸もたくさんあったな、お袋を俺の手で殺してしまう不幸と親父が人を殺した不幸が……。だが、これが幸せをつかむ試練だとしたら、次は絶対幸せなのだろう。

「神様……。両親と仲間を天秤にかけるなんてする、俺は罪なのでしょうか?」

言っても無駄だ! 神様なんて、自分の心の中にいる光なのだから。

今の俺が神様に何を言おうと、答えるのは心の影。つまり、悪魔なのかもしれない。

罪じゃないと、誰かが笑う。

(解)

裏山からの朝日が一段と輝いている、午前6時。昨日は裏山ですと一人で過ごしていた。100年罰当たりの謎を解き明かすため

に寝るのさえ忘れていた。

警察も昨日の奴等も俺を追ってこない。ここにいるのが分からないのだろうか？

「警察……。昨日の奴等……。」

そう思っていた俺。昨日眠らずに考えていた100年罰当たりの謎を解き明かすためのヒントが隠されていた。

「そうか、分かったかもしれない！」

俺の声が当たりの木々に跳ね返され、山びこのように声が帰ってくる。

「これで、100年罰当たりは終わる！犯人もトリックも見破った！」

だが、一つ問題点があった。

これをどうやって、みんなに知らせるかだ！

昨日の騒ぎで、学校に近づいたら、先生に怒られ、警察一発通報だ。それに、お袋の事件から日が結構経っている。警察の探しも本格的になっているだろう。

「どうしたら、いいだろう？」

（分からない。分からない。きっひひひひひ。）

悪魔の笑い声が響き渡る。

ふらっ！

「えっ？」

めまいもしだした。どうしちゃったんだ俺？

・
・
・

真っ白な、天井が俺を見下ろしている。どこか懐かしい香りがするここはどこ？

しゃっ！

その時、カーテンが開く音がした。

「お目覚めですか？ふふ！」

綺麗な女の人。・・・先生だ。

「えっ？先生？一体ここは？」

俺が、質問をすると、先生は先生の赤い髪を手でかき分けて、答える。

「ここは、先生の家よ！海道くんが昨日の注射の事件の後に、頭を打って気絶しちゃったから、先生が連れて帰ったのよ。」

「えっ？」

俺は驚きを隠せない。じゃあ、さっきのは夢ってことか？

「そんなに驚かないで！先生寝てる間には変なこと何もしてないから！」

先生は笑っている。だが、俺は笑えない。あれが夢だとしたら、あの推理は成立しないからだ

「先生！俺は昨日ずっとここにいましたか？」

「えっ？ええ！ずっと眠っていたわよ！」

そんな？嘘だろ？じゃあ、俺はあの注射をしたってことかよ！

「それより、海道くん。何をさっきから驚いているの？」

「黙れー！」

思わず暴言を叫ぶ俺。先生も驚いている。

「海道くん。少し落ち着きましょう！ね！」

「落ち着けるわけじゃないですか！せつかく見つけた答えを一瞬间にして消される思いがあなたには分かりますか？」

先生は真顔になる。

「答え・・・ね。言ってみなさい。あなたが推理した全てを。」

先生は知っている。俺が推理していることを。でも、そんなのはどうでもいい。

「昨日の奴等と警察はグルだったんだよ！」

ガチャ。

「龍ちゃん・・・。」

ドアが開く。そこには、俺の仲間達がいた。

（散る）

夕方、5時近く。狭い部屋の中には、俺、先生、優香、りん、桜ちゃん、天音ちゃんがいる。

「龍ちゃん！それは一体どういう事！？」

優香の鋭い質問が狭くて、暑い部屋の中に響く、

「お前ら何でいるんだよ・・・？」

少し戸惑う俺。

「答えて。」

優香の目つきは鋭さを増す。

「あれが、夢ならこの推理は通らない！」

「いいから、話せよ！」

「らんも質問の答えを要請する。」

「だから、夢ならば意味がない推理なんだよ！夢だったら意味がない！新しい推理をしなければ！」

「それでもいいんや話して！お願い！」

「りんも同じく・・・。なんでこいつら俺の推理を聞いたがるんだ？」

「だから・・・、げほっ、げほっ！げぼー！」

その時、むせあがる何か。俺が寝ていた布団には大量の血。

「ごほっ！ごほっ！ごぼー！」

続けて、同じ症状。さっきより激しい。

「海道くん！しっかり！桜さん！例のあれを！！」

「はい！」

桜ちゃんは、部屋の隅にある引き出しから、アルモノを取り出した。

「はあ、はあ。そっ！？それは？」

そうそれは昨日の注射だった。

「みんな！押さえて！」

すると、俺を押さえるべく、みんなが俺をつかむ。

「龍ちゃん・・・。今、楽にしてあげるからね・・・。」

俺の両腕を掴んでいる優香が小さな声で言った。

「やめろー！ー！」

俺は裏山の頂上まで登っていた。結構断崖絶壁だ。同じような時間が流れているようだ。俺はまた逃げ出した。仲間を傷つけて。殴ったり、蹴ったり……。逃げきった俺。きのうの奴等みたいな感じになっていた。みんな倒れて苦しんでいた。

「楽にするって、安楽死ってことだよな……。じゃあ、あの注射はやっぱり……。」

裏山から見える、景色は絶景そのもの……。俺の心を癒やしてくれているのだろう。

（罪）

絶景を目の前にしている海道龍牙。……。それは俺自身。

「罪があるのに罰はなし。」

俺のくせである、独り言。東山に来て何回言ったかも忘れた。

「……。くそつたれーーーーー！」

崖の下にめがけて叫ぶ。響き渡って、消えていく。

「何で！？何で！？……。神様って奴は俺ばっか見捨てるんだよ！

？せつかく手に入れた、仲間、場所、自分を守ろうとするために裏

山に入ったただけなのに！？……。何で！？」

こんな事になってるんだよ！？

声がかすれて最後の声は出なかった……。。

グシャグシャ……

落ち葉を踏んでくる足音が後ろから聞こえる。

「誰だ！？」

後ろを振り返る！？そこには……。？

「……。龍ちゃん。」

「……。優香！？それに、りん、らん！？」

俺は驚きを隠せない。警察だと思ったからだ。少し喜びも感じた。だがさつき、俺はこいつらにひどいことをした。あわせる顔なんてあるはずない。

「お前ら、俺が憎くないのか？蹴ったり、殴ったりしたじゃねーか！」

「憎いよー！！」

優香の声が裏山全体に響く！！

「憎いに決まってるでしょう……！？仲間にあんなことするなんて……。でも、それより憎いことがあるよ……！？」

優香の目にも涙か……。憎いのは当然か……。でもそれより憎いことって！？

「……龍ちゃん！？なんで裏山入ってんの？」

「……………ゴク
リ。」

何でだろう！？これだけは何故か怖い！？体全体が一気に冷えていく。

「……なんで、あたい達に隠し事するの？」

俺の体の震えはもう止まらない。自分でもそれは分かる。

「何で、あたい達から逃げているの！？」

「ヴアー……………」

俺の隣まで来たこいつら3人……。俺はもう実感した。

（こいつらは悪魔だな）

「俺の心に潜む悪魔らよ！？俺をいじめてそんなに楽しいか……

？俺は気づいた、俺がここにきておかしくなったのは、お前らのせいだな！」

そして、大声で叫ぶ！！

「太陽と一緒に沈みやがれ……………！！！」

最後の叫びなのだろうか！？声はもう出ない！！

遠くに沈んでいく太陽と一緒に、優香、りん、らんを崖に投げ飛ばした。

どうか俺の思いがとどきますように・・・。
体の感覚がなくなっていく。意識が遠のいていく。
次の俺ではきつと・・・。

・ ・ ・

平成20年9月。100年罰当たりの犠牲者。

海道龍牙・・・隣の県の山で血だらけで発見された。

紅川優香・・・行方不明。

花谷りん・・・行方不明。

花谷らん・・・行方不明。

木下 桜・・・行方不明。

木下天音・・・行方不明。

海道龍一・・・行方不明。

海道かよ・・・自宅で死亡。

大川十流・・・川に転落。

行方不明の者は未だ見つからない。

海道龍牙は、まだ息があつたのだが、間もなく死亡。ポケットの中から小さなメモ用紙が発見された。

<この、事件は悪魔が起こしています。裏山に行くと悪魔に取り付かれるのです。・・・警察と奴らはグルです。奴らに騙されてはいけません。自分の意思を持って。悪魔に打ち勝ってください。悪魔は心の影です。自分自身とたたかえばきつと・・・。>

もはや、何が伝えたいのかもわからない。乱雑な文字。所々に出てくる奴らとは・・・一体。

「富山さーん！コーヒーできましたー！」

「ああー！今行く！」

分らない。

調査は無限に続く・・・。

第1章＜完＞

影・解・散る・罪・最期（後書き）

今まで読んでくださった方！ありがとうございます。感想などを書いてくださるとうれしい限りです（> <）

第2章に続くので、ぜひ続けて読んでください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9468m/>

無限物語 第1章（人殺し）

2010年12月3日14時10分発行